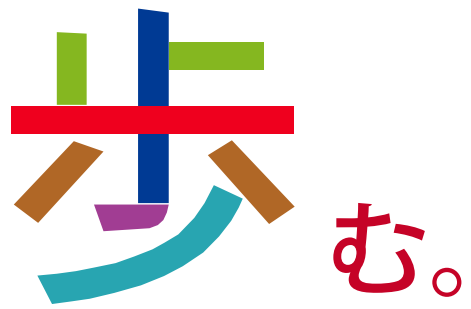


地域と大学が——



平成 27 年度
地域大学包括連携事業報告書



2016.3

まなびの環 わ 生涯学習

大阪体育大学

桃山学院大学

プール学院大学

泉大津市教育委員会



泉大津市マスコットキャラクター
おづみん

発刊にあたって

地域の絆や地域コミュニティの再構築および地域の活性化を目的として、大阪体育大学、プール学院大学・プール学院大学短期大学部、桃山学院大学及び泉大津市教育委員会がそれぞれ保有する人的、知的、物的資源を活用しながら連携・協力する「泉大津市教育委員会・三大学連携推進協議会」は2年目を迎えました。

初年度である平成26年度は、信頼関係の醸成とネットワーク構築を図りつつ、泉大津市の社会教育における地域課題抽出や情報共有を図ることにより、取組みをすすめるための準備を行ってきました。

本年度は、初年度に準備した環境を生かし、泉大津市民と連携大学の学生が相互のフィールドを行き来したことで、地域の知恵と大学の知識が拡散・集合し、知的刺激がさまざまな場面に影響を及ぼした一年だったのではなかったかと考えます。この協議会がさらなる知の発信源になることを志して、本誌を発行いたします。

平成28年3月31日

泉大津市教育委員会・三大学連携推進協議会



INDEX

- 3 生涯学習フォーラムⅡ つながりからはじまる学びの環^わ
- 11 2015 年度 MOMOYAMA エクステンション・カレッジ 伊藤市長特別講演
- 21 生涯学習・スポーツ推進 3 大学連携事業
- 24 企画展・講演会「戦争が残したもの」「戦争がもたらしたもの」
「真田伝説—泉大津に伝わる真田幸村・後藤又兵衛—」
- 30 対談 行政と大学がタッグを組むⅡ ～地域と大学の未来と可能性～
- 40 泉大津市教育委員会・三大学連携推進協議会設置要綱

生涯学習フォーラムⅡ

つながりからはじまる学びの環

日時 平成 28 年 2 月 28 日 (日) 午後 1 時 30 分～3 時 30 分
場所 テクスピア大阪 1 階小ホール

コーディネーター 岡崎 裕 (和歌山大学教授、泉大津市教育基本計画策定委員会副委員長)
活動報告 富山 浩三 (大阪体育大学教授、泉大津市社会教育委員)
活動報告 井上 敏 (桃山学院大学准教授、泉大津市社会教育委員)
意見交換会 車谷 喜博 (泉大津市社会教育委員会議長)、伊藤 晴彦 (泉大津市長)
富田 明德 (泉大津市教育委員会教育長)、泉大津市民の皆さん
司会 丸山 理佳 (泉大津市教育委員会事務局生涯学習課長)

◆プロローグ

丸山 ただいまより、生涯学習フォーラムを開催いたします。私は司会を務めます、生涯学習課の丸山と申します。よろしくお願いいたします。今日は、昨年の生涯学習フォーラムでお伝えした「学ぶ」を「届ける」、そこから生まれた今年度の生涯学習活動をご紹介しますとともに、「つながりからはじまる学びの環」を皆さまと共に考える場になればと思います。今年度の連携大学による活動報告の後、今後の生涯学習について市民と共に考える意見交換会を行います。開会にあたり伊藤晴彦泉大津市長よりごあいさつ申し上げます。



岡崎教授



富山教授



井上准教授



車谷議長



伊藤市長



富田教育長

伊藤 皆さんこんにちは。三寒四温といいますが、今日は本当にいい日よりです。「梅は百花のさきがけ」といいますが、京都の随心院や月ヶ瀬や南部梅林なども咲き誇っています。明後日は奈良東大寺のお水取りです。お水取りが終われば暖くなるといわれています。泉大津市では安心・安全のまちづくりをすすめております。「泉大津市に住んでよかった」と思えるように、WHO が進めるセーフコミュニティの国際認証取得をめざしております。教育委員会では昨年「まなびの環」をキーワードにした生涯学習を進めておりますが、これもまちづくりのひとつです。取組みのキーワードは「集まり、学び、結び、届ける」です。現在は豊かさの反面、豊かさゆえの悲劇もあります。人と人とのつながりが希薄になっているのです。市民、行政、団体がつながりについて、皆さんと有意義な意見のやりとりをしたいと思っています。本市では、一昨年からリトアニアのカウナス市と交流をはじめていますが、昨年、カウナスにできた陶芸博物館に私の陶芸作品を 5 点展示しました。今年はリトアニアとの国交 25 周年ということもあり、今度は国立美術館から寄贈の話をいただきました。一つのきっかけから国を越えたつながりができるような交流を今後もつづけていきたいと思っています。このフォーラムで、学びの場を再確認しながら、市民の皆さんとともにより良いまちづくりを進めていければと思います。最後までおつきあいください。

1. スポーツでつくる学びの環

丸山 では、第 1 部として連携大学による活動報告を、行っていただきます。まずは大阪体育大学の富山浩三先生にご報告いただきます。

富山 皆さんこんにちは。本日は天気のいい日曜日です。「一月は行く、二月は逃げる」といいますが、今年はオリンピックイヤーということで2月は29日まであります。リオデジャネイロ五輪は楽しみです。「スポーツでつくる学びの環」と題してそんなスポーツの話題をしたいと思います。まず、大阪体育大学と泉大津市の取組みからお話しします。現在3大学連携で進めているのが「学びの環」です。これは、「学び」を通じて自らを高め、学びの成果を社会に還元することで学びが連鎖し、社会全体における持続的教育力の向上に貢献することです。それをスポーツを通してどうやってつくるのか、ということになります。

まずは、スポーツをする人の数を増やしたいと考えます。日本全体で定期的にスポーツをしている人は約47%で、文部科学省はこれを65%以上に増やす目標を持っています。次に子どもの体力向上を図ります。最近の新聞では体力低下も底を打って回復傾向にあるそうです。統計上はそうでしょうが、昔のように野山を駆け上っていたころからすると、明らかに体力が低下しています。スポーツをする子どもとしない子どもの差もあります。スポーツ選手をめざす子どもがいる一方で週1回もスポーツをしない子どもがいます。そこを変えたいのです。スポーツを通して、大人から子どもまで、人と人との関わり合いを増加させることが究極の願いとなります。

それを実現するために、大阪体育大学と教育委員会が連携してめざしているのが、総合型地域スポーツクラブ（以下「総合型」）の設立です。現状のスポーツクラブでは、同世代が仲間内で一種目を楽しんでいます。それが悪いわけではありませんが、総合型は、さまざまな年齢の人が（多世代）、それぞれの目的で活動でき（多志向）、複数の種目を含んでいる（多種目）、総合的なスポーツクラブです。そこでは、市民がお客さんとしてではなく、クラブのメンバーとして運営等にも関わることで「学びの環」づくりが期待できます。

総合型は、文部科学省が推奨しているクラブです。大学連携の初年度は設立検討委員会を立ち上げましたが、今年度はクラブの設立理念の確立をするための設立準備委員会にコマが進みました。「どんなクラブをつくろうか」という話し合いをしっかりとしなければ、空中分解してしまいます。「泉大津市ではこんなクラブにしたい」という理念を、来年度かけて実行していくために、現在準備をしています。

初年度に実施したアンケート調査の結果をみると、「運動の目的」では「健康づくり」のためにスポーツをしている人が多いことがわかります。一方で「友人・仲間との交流」や「コミュニケーション」を「運動の目的」にあげた人もいることを考えると、「スポーツで経験したことを個人の中で止めないように、自分が健康になったことをどう人にお返しするのか」という、次の行動に移す方法が必要となります。「運動の目的年齢比較」をみると、「友人・仲間との交流」は年齢を問わず多いです、「コミュニケーション」と答えた若い人も多くみられます。総合型の狙いは、住民の自主性・自発性を引き出し、自分たちの環境を自分たちが担うこと（＝新しい公共）です。単にスポーツをするのではなく、セーフコミュニティ、お年寄りの生きがい、健康づくり、子どもの体力づくりなど、地域の課題解決と地域の可能性を引き出すことを考えています。スポーツが個人を豊かにし、文化として根付き、社会も豊かになる、そんなまちづくりの目線を持っていただきたいと思います。

「学校開放施設の満足度調査」は、活動団体がどんな意識で活用しているかをアンケート調査したのですが、この中にはバレーボール、バスケットボール、サッカーなどいろんな団体があります。それらの団体さんの満足度をみると、「学校開放している頻度」「施設の予約方法」「利用できる時間帯」の順で高いことがわかります。その一方で、「駐車場・駐輪場」「更衣室・シャワーの設置」では満足度が低くなっています。それぞれの団体活動だけでそれらを設置するのは難しいですが、総合型ではそのような設備を有しているクラブが全国にはみられます。総合型ならできることがあるということです。総合型の認知度をみると、58.3%の人が知っていると答えています。そういう人たちと関係づくりをして、さらに準備を進めていきたいと思っています。

総合型の他に実施したのが、留守家庭児童会（仲よし学級）での指導です。これは、大阪体育大学から卒業生をスタッフ（臨時職員）として雇用していただき、仲よし学級に所属する子どもにスポーツ指導をするというものです。7月、8月、12月、1月に、戎、楠、浜、条南、条東、上條、穴師、旭の各小学校仲よし学級でなわとびなどの指導をしました。例えばサッカー教室に通っている子どもは日常的にスポーツをしています。仲よし学級の子どもたちがスポーツに関わる機会は比較的少ないといえます。そんな子どもにスポーツを提供し、スポーツする子としない子の二極化を解消する取組みをしています。



連携事業報告をする富山教授

次年度はさらに進めて、子どもの体力向上プロジェクトを計画しています。子どもの体力を高めるとともに、スポーツを好きになってもらうことがねらいです。現在、モデル校設定の調整をしています。総合型のコンセプトに基づき、活動は週1回程度を想定しています。小学校時代にさまざまなスポーツに触れ、さまざまな身体の動きを学ぶことは、体力の向上や好意的態度の構築、二極化の解消につながることをめざしています。いろんなスポーツの楽しさも理解してほしいと思っています。サッカーばかりしている子どもにはバレーボールをすることで、バレーボールの身体の使い方を経験してもらいたいと思います。

循環という点でいえば、地域スポーツとトップスポーツとの交流も考えています。拠点クラブでトップアスリートを活用し、地域のジュニアアスリート等を指導し、学校では「小学校体育活動コーディネーター」として、地域スポーツとトップスポーツを好循環させたいと思います。日頃接点のないオリンピック選手やプロから直接学ぶと、子どもの心は動かされます。大阪体育大学にはトップ選手や先生がいます。昨日うちの大学内でラグビーの体格のいい選手が、子どもたちに指導をしていました。子どもたちにすれば、体格のいい選手を目の当たりにするだけでいいインパクトです。そんな選手を連れてくることも考えています。

好循環を維持するためには、拠点クラブを核としたエリアネットワークの構築をしなければなりません。自立・継続化が必要です。スポーツ好きになる経験をつくるために、夏のキャンプ、冬のスキーなどシーズンスポーツも取り入れることも考えています。スポーツを通じて泉大津市が元気になればいいと考えています。

2. 桃山学院大学との連携事業報告

丸山 富山先生ありがとうございました。続きまして桃山学院大学の井上敏先生にご報告いただきます。

井上 昨年度からの連携事業の流れは、泉大津市と桃山学院大学の施設や制度をどう使ったらお互いのためになるのか、ということであったと思います。桃山学院大学のことを泉大津市に知っていただく取組みもしましたし、泉大津市のことを桃山学院大学で紹介する事業もいたしました。そのことは今年度も引き継いでおりますが、今年度の連携事業の特徴は「戦争」の一語に尽きると思います。昨年は第二次世界大戦が終結 70 年という節目の年でした。「戦争」を通じて文化財を残す意味、博物館の意義を考える取組みをいたしました。では、事業内容について順を追って報告いたします。

MOMOYAMA エクステンション・カレッジは、桃山学院大学エクステンション・センターが開催する学外社会人を対象とした連続講座で、昨年度は「ヒツジのまちのイメ〜〜ジー泉大津を体感する」と題して2015年5月から6回講座として開催しました。本学は、泉州地域に密着した大学となりまして昨年で20年が経ちました。その記念すべき年に泉大津市長、教育長ほかの皆さんに講演していただきました。



連携事業報告をする井上准教授

また、私は桃山学院関連の史料を収集する部門である桃山学院史料室の室長をしておりますが、その学院史料室が持っています桃山学院の史料を、企画展「桃山学院の歴史と文化」と題して、織編館と市役所ロビーで展示いたしました。

戦争関連事業は先ほど、昨年は「戦後 70 年」と申し上げましたが、それだけで、展開したわけではないことを、あらかじめお断りしておきます。今日は戦争体験調査の報告書として出しました『学生たちと学ぶ戦争の記憶』の冊子も配布しておりますが、この冊子の解説部分で、なぜ私がこの取組みを実施したのかを書かせていただきましたので、詳しくはそれをお読み下さい。

実は、一昨年ある会議に伴う見学会で、沖縄県糸満市にある、ひめゆり平和祈念資料館を訪れました。ひめゆり部隊の話は知っていましたが、現地に行ったのは初めてでした。資料館で、教えている大学生くらいの年齢のひめゆり学徒たち一人ひとりのエピソードのパネルをみて、衝撃を受けました。私が実体験したわけではないにしても、現地で記録に向き合い、戦争の悲惨さを追体験しました。同時に、今まで「わかってなかった」自分に気づき、「他の人にも伝えてもいいのか」という点が気になりました。私が担当する文化財保護の科目で学生に戦争の話もしましたが、その中で、体験していない人に伝えることの難しさを痛感していました。それは、学生たちとともに行った戦争体験調査でも感じました。ある学生が「なぜ軍隊に行きたいと思ったのですか」という質問をしました。聞かれた方は「当時は軍隊に入ることがいいことだと教えられていたから」と答えました。学生はその感覚が理解できないようでした。実体験は伝わりにくい。でも、掘り起こして新しい世代に伝えなければ残らない。そのことが「戦争」関連事業の実施につながりました。戦争体験調査では食糧不足や空襲などのお話が多かったのですが、軍隊での体験はお話しただけで残念でした。最近、「人を殺してみたかった」殺人もよくおこっています。現在は生と死の感覚が薄れています。そういうことから、軍隊での生々しい話、特に人を殺すということがどういうことかを知りたかったのですが、聞けませんでした。ただ、その背景には深刻な問題がありました。語れる人が亡くなってしまっているのです。だからこそ、遅きに失したことも事実ですが、急いで戦争の記憶を残さなければならない、と思いました。調査成果は、報告書作成とともに、桃山学院大学の大学祭である「桃山祭」や泉大津市役所ロビーでも展示いたしました。

企画展「戦争が残したもの」は、織編館と桃山学院史料展示コーナーの 2 箇所で開催しました。また、関連記念講演会として「戦争がもたらしたもの」(全 2 回)を実施し、桃山学院史料室の西口忠さんが「日露戦争とキリスト教」を、玉置栄二さんが「旧制中学校と戦争」と題した講演を、テクスピア大阪で行いました。玉置さんの講演で、天皇真影をミッションスクールである桃山中学校に迎えるにあたって苦悩があったというお話があり、泉大津市民にとっては経験することのなかった驚きの内容だったと思います。桃山学院と泉大津市、お互いの記憶を知るという意味において意義深いものだったと思います。

他には次の各事業を実施しました。企画展「真田伝説」は、大坂の陣 400 年を記念し泉大津市の特産品であった真田紐関連の展示を織編館と桃山学院史料展示コーナーで実施しました。「英語で遊ぼう」は、各小学校に大学から講師を派遣し、英語のゲームや歌などをしました。「地域博物館多言語化事業」は、学習館と織編館の展示案内に外国語や音声ガイダンスを取り入れた事業です。「桃山学院史料室紀要記事掲載」では、主に桃山学院史料室が関わった泉大津市との地域連携事業の成果等を掲載しております。以上の内容は、いずれも文化財・博物館連携として進めてきた事業ですが、その根幹は「地域の記憶をどう記録し、どう残すか」、つまり「学びの環」の視点であり、第 2 部の意見交換会につながるものといえます。これで報告を終わります。

丸山 井上先生、ありがとうございました。これで第1部を終了いたします。

3. 意見交換会

丸山 ただ今より第2部「意見交換会」に移ります。本日のコーディネーターは和歌山大学教授の岡崎裕先生です。岡崎先生には、各先生からの報告を踏まえ、活動の印象についておうかがいした後、意見交換会の進行をお願いいたします。それでは、岡崎先生よろしくをお願いいたします。

岡崎 まず、前半の印象を申し上げます。昨年は様々な取組みを、桃山学院大学、大阪体育大学を通じて実施されました。それと同時に、泉大津市民がプロジェクトに積極的に関わって盛り立てていると感じました。私は現在、和歌山大学教育学部に所属していますが昨年度はプール学院大学の担当者として関わり、第1回の生涯学習フォーラムにも参加しました。昨年のフォーラムは「学びの環」がテーマでしたが、1年経って市民の皆さんとの関わりで「環」ができつつあると感じています。

プール学院大学にいた昨年度から作業を進めていたものに、南大阪地域コンソーシアム事業があります。南大阪地域コンソーシアム事業は、南大阪地域の大学が広範な分野で連携を進めることで地域社会に貢献することを目的とした産官学連携事業のことです。泉大津市では、会員大学の単位互換講座をプール学院大学が幹事校となって、中央商店街の活性化をテーマとする講座を行いました。30人ほどの学生が参加しましたが、実は募集時点での応募者は100人以上でした。定員の関係で多くの学生に受講していただけませんでした。「ぜひ泉大津市のまちづくりに関わりたい」と考える学生がこれほど多いというのは、大変うれしい誤算でした。彼らは積極的に商店街の活性化のために、イベントや展示会を開催しました。泉大津市の姉妹都市である日高川町からはジャガイモやミカンを運んで、産地直売もしました。このことが明日からすぐに活性化につながるわけではありませんが、若い人がその力を次の時代へ向けるきっかけになります。泉大津に大学はありませんが、大学生はいます。その力を集めて、「次の泉大津」をつくりたいのです。南公民館、北公民館を含めた生涯学習の活性化にも、プール学院は関わってきました。「若い世代も含めた全ての市民の力を結集したい」というのが、私の立場です。私は泉大津市教育基本計画づくりにも関わっていますが、皆さんが学んだことをどう次にバトンタッチするのか、そこを軸に意見交換会を進めたいと思います。まずは伊藤市長からお考えをお話してください。

伊藤 フォーラムのちらしに円相が描かれています。京都の源光庵には、丸い「悟りの窓」と四角い「迷いの窓」がありますが、円は限りなく循環するイメージがあります。私の立場は「安心・安全なまちづくり」です。今までにないまちづくりをするために、WHOのセーフコミュニティをオール泉大津で取り組んでいます。その中で企業の皆さんにも参加していただいています。例えば、市内全校の仲よし学級の教室の絨毯敷は一企業の寄付で実施しました。また、市内に防犯カメラを設置する事業では3駅を泉大津ロータリークラブさんが設置していただきます。ライオンズクラブさんも、子どもの防犯ブザーを寄付していただきました。みんなが同じ方向に向いて進んでいます。昨年8月からはじめた「子ども食堂」ではお米屋さんや生協さんが協力してくださいました。教育面では、リトアニアの日本大使館にいた杉原千畝が6,000人もユダヤ人の命を救った歴史を教育にも取り入れたいと考えております。井上先生もおっしゃってましたが、今は生と死のあり方がわからなくなっている時代です。それを解決するのは学習しかありません。欧米ではリカレント教育や循環教育をしており、一度社会に出てまた大学で勉強し、また会社へ戻って仕事を続けることができます。今の日本では難しいと思います。そういったチャンスや機会を市民に提供することも大切だと思っています。

岡崎 市長から方向性をいただきました。次に社会教育委員会の車谷議長からご意見をいただきます。

車谷 伊藤市長から子ども食堂のお話をいただきました。子どもは国の宝といいますが、本当の宝にするためには教育が必要です。ところが、家庭内の教育力、地域の教育力が低下しています。日本の人口が 94 万人減少した一方で、世帯数は 5000 万世帯を超えました。ひとり親家庭や単身者が多いということです。シングルマザーは収入も少なく 6 人に 1 人が貧困家庭で、家庭内教育力の低下の原因となっています。また、単身世帯では地域のつながりが薄れ、地域活動に参加しない人が増えており、地域の教育力が低下しています。そんな時代だからこそ、このフォーラムは大変意義があります。目標達成のため行動していきたいと思います。

岡崎 力強いお話、ありがとうございました。つづいて、教育行政の立場から富田教育長、お願いいたします。

富田 昨年のフォーラムでは「学びあうことが大切」だということで、キックオフ宣言をしました。みんなで学びあえたらと思います。昨年以來、大学連携によって社会教育の中身が充実してきたことを実感しています。市だけで考えるよりはるかにレベルの高いものができました。泉大津の歴史は古く、団体も多くあります。先生方のお話を実行していかなければと思います。例えば、総合型をめざすならば、関わる人が変わらなければやっていけません。教育委員会事務局、市民ともに変わらなければいけないと思います。

岡崎 まさに、泉大津市職員、大学、団体、市民、それぞれが力を合わせる必要があります。立場の異なったご意見もいただきたいと思います。まずは、南公民館クラブ協議会の方からご意見をお願いいたします。

南公民館クラブ協議会代表 私は 29 歳でスキーの指導員になり、中学校や高校の修学旅行で学生をスキーに連れて行ったりしました。今はそれがなくなりました。指導員の免許は 2 年に 1 回更新しますが活躍する場がありません。市の広報誌でスポーツ指導員募集の記事をみて応募しましたが、年齢制限のため断られました。健康でヤル気があれば健康年齢でお願いしたいと思います。また、体育館改修に約 3 億円かかり、市民会館は廃止になると広報誌に載っていました。図書館の相互乗り入れのように、陸上競技場は和泉市に、プールは高石市に、公民館施設がたくさんある泉大津市は学びの場に、というような広域連携はできないでしょうか。

岡崎 規制緩和ですね。取り組むべき課題だと思いますね。次は北公民館クラブ協議会の方、お願いいたします。

北公民館クラブ協議会代表 公民館利用者にはお年寄りや障がい者の方もおられます。生涯学習課とも会議をしたのですが、エレベーターがないため階段の昇降ができず、クラブをやめてしまうお年寄りの方がおられます。設置要望をしても「構造上ダメ」といわれました。階段利用が不便な方は、なかなか公民館に来られません。エレベーター設置を要望します。

岡崎 現実的な要望が出されました。次に、総合型地域スポーツクラブ準備委員会の方、お願いいたします。



意見交換会の様子

総合型地域スポーツクラブ準備委員代表 私はスポーツ推進協議会に所属して生涯学習に関わってきました。チャレンジ・ザ・ウォークを毎年5月に開催し、300人市民の皆さんが参加して盛況ですが、より幅広く気軽に参加してほしいという課題もあります。総合型地域スポーツクラブは意義あるものと考えていますが、これはゼロからのスタートです。これまで8回会議を行い、泉大津市ではどんなクラブにしたいのかを話し合いました。総合型地域スポーツクラブを通じて市民同士がつながってほしいと思っています。

岡崎 まさに新しいうねりを実感しました。戎小学校図書室開放のボランティア組織の方、お願いいたします。

戎小学校図書室開放事業ボランティア代表 リブレEBISUはおおさか元気広場の一環として毎週土曜日9時～12時に実施しています。ボランティアは現在13人で、読み聞かせ、紙芝居、クリスマス会などもしています。若いお母さんや校区外の人、地元からも年配の方が来られて、モノ作りなどを子どもたちに教えておられます。

岡崎 様々な活動が広がっていると感じました。次に婦人協議会の方、お願いいたします。

婦人協議会代表 昨年、「活動の成果を地域に還元」とお聞きして、正直ショックを受けました。会員さん同士で活動の情報を伝えているので、「還元できている」と思っていました。そうではありませんでした。私はセーフコミュニティの災害対策に参加したので、今年は防災をテーマに還元の取組みをしました。会では毎年手芸講習会をしていますが、今年は子ども版防災頭巾をつくって、一番長い間学校にいる仲よし学級の子どもに使ってもらう活動にしました。また、子どもの防災意識を高めるため防災かるたもつくりました。実際にかるたで遊んでもらうと、読み手が読みはじめた瞬間に絵札がとられてしまうので、防災意識が高まったのかは疑問ですが、防災頭巾はとても喜んで、頭に被って遊んでくれました。外に目を向ける機会をいただけたことに感謝し、私たちの歩みは小さな一歩かもしれませんが、次の活動につなげたいと思います。

岡崎 つながりができつつあるという、貴重なご意見でした。その他のご意見もおうかがいしたいと思います。

子ども会ボランティア学生 子ども会では今、指導者の参加人口が減っていることが問題になっています。私は今22歳ですが、その上の方は51歳です。中間の人がいません。子ども人口が減っている上、子どもの参加率も少なくなっています。どうすれば子ども会に興味を持ってもらえるのかを会議などで考えています。

岡崎 若い方にも「循環」の課題があることがわかりました。多くの皆さんからご意見をうかがいましたが、これらのお話をふまえて、先生方に今後の展望をおききたいと思います。まずはスポーツの立場から富山先生お願いします。

富山 子ども会のお話にもありましたが、いろんな組織で循環が課題です。閉じた組織ではいけません。総合型では、既存組織をつなぐネットワークの役割も果たします。子ども会、公民館組織、婦人会など様々な団体さんに関わってほしい。団体さんはそれぞれの強みを持っており、それを一緒に考え活用する。例えば、普段やっている活動に「歩く」という要素を加えると、スポーツになるわけです。「総合型地域スポーツクラブ」から「スポーツ」という言葉を取り払って「総合型地域クラブ」に広がるまでやっていきたいと思っています。

岡崎 次に、文化財・博物館分野の立場から井上先生、お願いいたします。

井上 私は文化財が専門ですが、文化財とは指定されているものだけではありません。歴史の古い新しいということだけではありません。大切なのは「残す」ということを決めなければ残らない、という点です。かつては文化財保護の考え方では100年経過しないと指定文化財にはなりません。すると原爆ドームは指定できません。でも、原爆ドームは日本が世界に発信できる価値ある文化財です。100年経過という定規では測れません。「残す」と決めたとこそ、残ったし、世界遺産になったのです。残すモノについて学び伝える「学びの環」をつくる必要があるのです。この地域でいえば、南海地震が今後数十年のうちに起るといわれていることから、これからは震災遺構が増えてくるかもしれません。

岡崎 最後にもう一度、皆さんのお話をふまえて伊藤市長からご意見をいただきたいと思います。

伊藤 様々なお話をいただきました。公共施設は適正化計画を進めていますが、公民館のエレベータ設置は、物理的に不可能です。広域化については、できるところはしていきたいと思います。婦人協議会さんには一つの大きなハードルを乗り越えていただきました。遺族会さんには昨年のピースディスカッションで子どもたちに戦争体験を伝え、すいとんづくりを指導していただきました。「来年の活動指針が見えてきた」との言葉もいただき、学びを伝えることが生きがいになられていると感じました。団体さんが自ら意識して活動してほしいし、そのため、大学の先生方にアドバイスいただきたいと思います。学校教育と両輪で生涯学習を進めていかなければ、まちづくりも子ども育成もできません。力を入れていきたいと思います。

岡崎 市長から、力強いお言葉をいただきました。私はいくつかの審議会にかかわっていますが、それらの中で「高齢化に対応するため世代交代すべし」「英知を次の世代に伝えるべし」という話が多くでした。しかし、これまでのお話をうかがうと、ご年配の方はすでに伝える準備ができています。あとはその仕掛けをわれわれがいか用に用意するかという点です。全体を通じて印象的だったのは、戦争や命の話が出る中で、知識や学びをつなぐ意味は、単に経験をつなぐのではなく、命をつなぐことではないかということです。「つなぐ」努力を、3年目の取組みに向けて、皆さんと頑張っていきたいと思います。

丸山 ありがとうございます。教育委員会では、生涯学習推進計画の策定を進めておりますが、今後「まなびの環」を推進するにあたって、本市がめざすべき今後の展望について、教育長よりお話しをお願いいたします。

富田 「つながりからはじまる学びの環」は第4次泉大津市総合計画の中に示された4つの「まちづくりの方向性」の基本理念の1つ、「自分たちで育て、自分たちも育てられるまち」と関連した取組みです。子どもと大人、学校園と地域、その中に団体、ボランティア、企業が参加することにより、豊かなつながりの中で楽しく学びあうしくみをつくりたいと考えています。

大学連携事業は3年目を迎えます。総合計画、教育基本計画では理念を示しましたので、生涯学習推進計画は行動計画となります。具体的に何をしていくのか、そのことが必要となってきます。市民、大学の先生、団体、参加者の皆さんと一緒に参画していただき、よりいいものをつくっていきましょう。ありがとうございました。

2015 年度 MOMOYAMA エクステンション・カレッジ 伊藤市長特別講演

桃山学院大学エクステンション・センター × 泉大津市

はじめに

桃山学院大学エクステンション・センターと泉大津市は、学外社会人を対象とした講座「2015 年度 MOMOYAMA エクステンション・カレッジ」を「ヒツジのまちのイメ〜ジー泉大津を体感する」と題して 2015 年 5 月から共同で開催した(全 6 回)。

- 第 1 回 5 月 14 日(木) <特別講座>泉大津市長講演 受講者数 52 名
講師：伊藤 晴彦(泉大津市長)
毛布の町として栄えた泉大津市の、新たな挑戦と未来について語る。
- 第 2 回 5 月 21 日(木) 泉大津、海とヒツジの物語 受講者数 7 名
講師：村田 文幸(泉大津市教育委員会事務局文化財係長)
海とともに歩んだ泉大津の歴史・文化について考える。
- 第 3 回 5 月 28 日(木) 泉大津市立織編館(エクスカーション・体験型見学会) 受講者数 10 名
講師：小林 肇(泉大津市立織編館長)
地域産業である毛布関連の展示を見学し、毛布の歴史や技術を学ぶ。
- 第 4 回 6 月 11 日(木) 重要文化財泉穴師神社修復工事見学会(エクスカーション・体験型見学会) 受講者数 24 名
講師：丸石 暢彦(公益財団法人文化財建造物保存技術協会)
修復中の重要文化財泉穴師神社の修復現場を見学する。
- 第 5 回 6 月 25 日(木) 池上曾根弥生学習館(エクスカーション・体験型見学会) 受講者数 15 名
講師：奥野 美和(泉大津市教育委員会事務局学芸員)
弥生時代をテーマにした体験学習を通じて、国史跡池上曾根遺跡を学ぶ。
- 第 6 回 7 月 9 日(木) 教育・文化の薫るまちづくり〜泉大津市の取組〜 受講者数 26 名
講師：富田 明德(泉大津市教育長)
少子高齢化を背景に、市民の学びの充実をめざす独自の取組を、行政の現場から語る。

本誌ではこれらの取組の中から、第 1 回の伊藤市長による講演内容を紹介する。5 月 14 日(木)に第 1 回として桃山学院大学(聖ヨハネ館 1 階)で行った特別講演では、泉大津の概要、歴史、産業を紹介したあと、現在泉大津市が取り組んでいるセーフコミュニティ、商店街再生、リトアニアなどとの国際交流などを話題とした。参加者からは「泉大津市に住んでみたい」という声も聞かれた。

＜特別講座＞泉大津市長講演

泉大津市長 伊藤 晴彦



◆プロローグ

梅本 皆さんこんにちは。エクステンション・センター長の梅本（桃山学院大学経済学部教授）と申します。桃山学院大学では、地域自治体との連携事業を行っており、今年度のエクステンション・カレッジでは、連携先である泉大津市さんと河内長野市さんにご協力いただいております。昨日は河内長野市長さんにご講演いただきました。本日は泉大津市の伊藤市長さんにご講演していただきます。

お聞きしたところ、伊藤市長さんは漫才師のオール阪神さんの従兄弟だそうで、阪神さんは泉大津市の名誉大使になられているそうです。市長になられる前は行政職員だったということで、行政経験を生かして、現在市長として活躍しておられます。泉大津市の歴史も含めて、現在の課題とチャレンジについてお話しさせていただきます。それでは、よろしく願いいたします。

伊藤 泉大津市長の伊藤でございます。私が大学という場所へ来るのは40年ぶりのことで、大学を卒業して以来です。

先ほど、こちらのキャンパスにバラが咲いているのを見ましたが、本当に気候のいい季節です。このような清々しい時期に、このような時間をいただけることを、大変光栄に思っております。エクステンションというのは拡大とか拡充という意味ですが、これから泉大津にまで学習を拡充していただきたいと思います。それではこれから、泉大津の概要と、未来に向けたまちづくりについて、お話しをさせていただきたいと思います。

◆泉大津の概要

伊藤 泉大津市は面積が13.41平方キロメートル、人口約76,000人、東西は約5.4キロメートル、南北は約5.5キロメートルの、平坦でコンパクトな市です。交通の便は大変いいところです。

私は生まれも育ちも泉大津です。海が家のすぐ近くでしたから、私が小学校低学年の頃はまだ大阪湾が埋め立てられる前でしたから、海水パンツにタオルを持ってよく遊びに行きました。その頃の泉大津の海岸は砂浜で、50メートルごとに沖へ堤防が突き出ていました。そこでよく、砂にトンネルを掘ったり、潮干狩りをいたしました。

「大津」という地名ですが、古代では「おづのとまり」や「大津浦」という名で出てまいります。「津」というのは港のことです。和泉国の国府は現在の和泉市府中町付近にあったのではないかともいわれていますが、大津の港は和泉国府の玄関口でした。泉大津という地名は和泉国の一番大きな港という意味なんです。だからかつての泉大津にとって、海は身近な存在だったのです。この海沿いの地域から、泉大津の産業は発達しました。

南海泉大津駅を降りて、海側の駅前ロータリーに羊のモニュメントが建っています。羊は泉大津市のイメージキャラクターです。なぜ、羊なのか。実は、泉大津は毛布製造で国内シェアの90%以上を誇るまちなんです。毛布の原料は羊毛ですから、泉大津は羊のまちといえるんです。江戸時代の泉大津は、海に面した大津村という地域で、真田紐などの綿織物が盛んでした。それが明治時代になって外国から入ってきた毛布をまねて、最初は牛の毛で毛布をつくりはじめました。赤く染めたので赤ゲットといいました。ところが、牛の毛でつくった毛布はゴワゴワしている上に臭いもすごい、という代物でした。そこで、改良を重ねて品質のよい毛布をつくるようになり、現在に至っています。毛布の歴史については、市立織編館で展示していますので、ぜひお越しください。

羊毛だけでつくった純毛毛布、木綿でつくった綿毛布、化学繊維でつくった毛足の長いマイヤー毛布やアクリル毛布など、毛布にはさまざまな種類があります。この化学繊維でできた毛布は大変長持ちします。実はこのことが一因となって、毛布が衰退していきます。長持ちすれば買い替える必要がないので、需要が減るというわけです。昔は1,000社あったといわれる毛布関連企業ですが、今では50～60社ほどになってしまいました。

衰退してきたとはいえ、泉大津は毛布のまちであることに今も変わりはありません。毛布産業は泉大津市民の生活と密接に関係してきました。

毛布製造が栄えていた昭和30～50年代頃の泉大津では、多くの市民が毛布産業となんらかの関係のある仕事についていました。毛布産業では製造工程を分業化することが多く、市内にはたくさんの関連中小企業や自営企業があり、織機を動かす「ガチャン、ガチャン」という音とともに、商品や資材を運搬する軽トラックがあちらこちらで走り回っていました。私の家の裏も毛布工場だったので、朝は7時45分頃から夜は12時15分頃まで、ひっきりなしに織機の動く音が聞こえていましたね。遊びが「悪」で、働くのが「善」というような風潮がありました。

こうして大量につくられる毛布の中には、販売用のものだけでなく、他に用途に使われるものもありました。その一つが、災害時に活躍する真空パットの備蓄用毛布です。最近、ネパールで大きな地震災害がありましたが、そのようなことが起こった時に被災地で使用するために開発されました。阪神淡路大震災や東日本大震災でも活躍いたしました。余談ですが、以前の真空パット毛布は薄すぎて、冬場では6枚ぐらい重ねないと暖をとれないようなものでしたが、最近のものは2枚あれば寒い冬もすごせるようなものになっています。

◆毛布のまちの地域再生～安心安全とセーフコミュニティ～

伊藤 このように毛布とともに発展してきた泉大津ですが、毛布産業も次第に衰退し、時代そのものも大きく変化してきました。私は、今は不確実な時代だと思っております。いつの時代においても変化と創造がなされてきたことは事実ですが、今の時代ほど変化の速い時代はありません。確実だと思われたものが、すぐに確実ではなくなる時代にあって、その変化に乗り遅れない行政のあり方が問われているのです。時代の変化によって、今、泉大津が抱えている問題、そしてそれを解決するためにチャレンジしていることについて、これからお話しさせていただきます。

実は、私は泉大津のまちが嫌いでした。嫌いでしたが、泉大津を出ようとは思いませんでした。逆に「嫌いなまちならよくしていこう」という気概を持っていました。ではどんなまちにしていくのか、それが私の掲げる「安心安全のまちづくり」ということになるのです。

具体的な問題は様々あります。その一つが待機児童の問題です。先ほど、市内には毛布関連の中小企業や自営業が多くあったと申しあげましたが、毛布の仕事は自宅である場合が多いので、かつて毛布産業が盛んだった時代は、現在のような待機児童はありませんでした。パートへ行かなくても、材料を軽トラックで自宅まで運んでもらって、自宅で子どもたちの面倒をみながら仕事のできたのです。

子どもの見守りは、かつては家庭内だけではなく、地域のみんなが自然にやっていました。地域の住民どうしがつながっていたのです。かつては夏になると、男性は団扇とステテコ姿、女性はシュミーズ姿で床几に腰かけ談笑して、夕涼みを楽しんでという、ほのぼのとした光景がそここでよくみられました。また、家で珍しい食べ物を作った時なんかは、隣近所におすそ分けを持っていく。また、お返しする。持っていくのは子どもの役目で、持って行った先でお駄賃に 10 円もらえる。そんな風に、みんながしょっちゅう顔をあわせて協力しあって生活していました。つまり、つながっていたのです。「トントン トンカラリンの 隣組」です。

今はどこの市町村もつながりが希薄化しています。「隣は何をする人ぞ」です。隣人のことがわからない、隣人のことをかまわない。自分を大事にするということは大切ですが、その意味がどうも間違ってきたのです。これは待機児童だけの問題ではありません。少子高齢化の問題とも関わっています。そして、その根底にあるのは地域コミュニティの問題なのです。

私は 3 年前に市長選にチャレンジしまして市長になりましたが、一番最初に力を注いだのが、この地域コミュニティでした。地域をなんとかしなければいけないと思い、その重要性を訴えましたが、なかなかうまく伝わりませんでした。そこで注目したのが WHO のセーフコミュニティという概念です。これは、「体系だった方法によって安全の向上に取り組んでいる」コミュニティのことで、地域の問題を明らかにし、その対策を講じ、成果を評価しながら、安心・安全のまちづくりを進めるコミュニティのことです。これなら具体的に訴えられる、と考えたのです。そこで、WHO セーフコミュニティ認証の平成 28 年度取得をめざすことにいたしました。

平成 26 年 6 月 5 日に泉大津市セーフコミュニティ活動開始宣言を行いまして、11 月 18 日、地域の重点項目となる 6 分野合同の、第 1 回セーフコミュニティ対策委員会を開催しました。6 分野というのは、子どもの安全、犯罪防止、災害安全、交通安全、高齢者の安全、自殺予防のことです。子育て支援の分野では、すでに「子ども医療費助成制度」の対象年齢を平成 27 年 4 月 1 日より拡大し、条件つきではありますが、小学校 6 年生まで入院・通院保障を拡充しました。

セーフコミュニティ認証を勝ち取るための核として考えているのが、公設公営である市立病院です。今後、市立病院の果たす役割はますます重要になると思っています。高齢者の安全についていえば、13 年前はまだ、介護と医療は別だといわれていましたが、今は違います。少子化対応については、市立病院には周産期母子医療センターがあり、この施設は、泉北では他に光明池にしかありませんが、ここを起点に子育て支援の取組みができるのではと考えています。不妊治療についても大阪府内では 3 市だけが助成を行っています。

この市立病院を中心に、市内の施設が連携する動きを加速させていくつもりです。泉大津市内には乳児院があります。ここには育児放棄や虐待を受けてきた子どもたちが生活しています。乳児院や幼児院というような施設は、堺以南では泉大津市にしかありません。また、虐待が起こった際の対応として 11 年前に立ち上げたキャピオがあり、虐待の芽を事前に摘み取る取組みも保健センターでしています。市立病院から保健センターに連絡してフォローアップし乳児院とも連携を図っていく、市のどこの部署に虐待の連絡が入ってもすぐに対応に立ち上げられるような、そんなシステムの構築を考えています。



このようなネットワーク構築の先に目指しているのは、シームレスケアという考え方です。「シームレス」とは「つなぎ目がない」という意味です。発症から回復まで、一つのシステム化された中で支援することが理想だと思います。子育て支援、発達障害の問題、高齢化の問題、いずれもつなぎ目のない支援によって解決する仕組みが必要です。そのためには、行政側の改革も必要です。市職員のあり方や立ち位置を見直し、ルーチンの仕事だけで完結していないかを日々検証することが大切です。先ほど、今は不確実な時代だということを申し上げましたが、変化のスピードが激しいこの時代に、乗り遅れない行政にならなければいけません。

◆行政と市民の意識改革

伊藤 時代の変化に対応する、そのためには、その時代に生活している私たち自身が変わっていかなければいけません。行政職員も市民も、それぞれの立場で自己改革をしてこそ、安心・安全のまちづくりがすすめられると思います。ここからは少し、私に取り組んでいる市職員と市民の意識改革についてお話ししたいと思います。

先日、市民の方からある質問が郵便で届きました。質問の内容はともかくとして、質問に対する回答を市職員が郵便で行い、その回答への再質問を市民の方が郵便で出されました。するとその回答をさらに市職員が郵便で行うということを、半年間つづけていたということがありました。悪いコミュニケーションの例だといえます。泉大津市は東西約 5.4 キロメートル、南北約 5.5 キロメートルしかない市だと申し上げましたが、市役所はその中心にあるので、市役所から市の境界までだいたい 2～3 キロメートルしかないんです。自転車で行けば、市内の一番遠いところでも 15 分ほどでいけます。それなのに、一つの質問を半年もかけて処理していたんです。これではいけません。

いくら市長が「安心・安全」や「セーフコミュニティ」と声高に言っても、市職員が協力し、市民の皆さんと一体にならなければ進んでいきません。よく「市民協働」といいますが、行政職員が市民と直接話し合うことは大切なことです。話し合いがなければコーディネートやプランニングが現実味もなくなり、弱いものになります。これまではコンサルティング会社に丸投げしてきたことが多くありました。それをやめて、市職員自らが主体者としてコーディネートしプランニングを実行していく、そのように変えていく必要を感じています。

このたび泉大津市では、市の方針を決める「第4次総合計画」を策定しました。これまでは市が骨格だけをつくってコンサルティング会社に丸投げしていましたが、その手法はやめました。市民と一体となってつくる上位計画ですので、市民の方に入ってもらうことが必要です。そこで、一昨年の7月から市民との会議をはじめました。会議では大人の方だけでなく、中学生会議、大学生会議、成人の会議、職員の会議など、様々な年齢の人たちの会議を116回開催いたしました。計画としてはなかなかいいものができたのではないかと考えております。自分たちのまちを自分たちでよくする、市民が参加した計画に沿って今後10年間の泉大津の行政が進んでいくのです。そうすることによって、いろんなところが少しずつよくなっていく、それは間違いないと思うのです。

私は建前が嫌いです。それで損をすることもたくさんあるかもしれません。でも、計画をつくる上で本音と建前の距離があけばあくほど、それを実施することを考えれば決していいものにはならないのではないのでしょうか。それは人間関係についても同じだと思います。本音で市民の皆さんと話をしていきたい。それが私のスタンスです。

大学の敷地のことを「キャンパス」といいますね。これは「キャンプ」という単語からきています。「キャンプ」とは、もともとラテン語で「腹を割って話をする」という意味です。「同じ釜のメシを食う」ということなんです。同じ食事をして同じテントで寝る、それがキャンプなんです。腹をわって話をし、一つになる、仲間になる、いい人間関係をつくる。そういう「キャンプ」を、私は高校生の時から41年間、キャンプを通して青少年ボランティア活動をやってきました。いい経験をしてきたと思っています。

「腹を割って話をする」ということが、今では少なくなってきましたが、かつては地域の中で当たり前のように行われていました。そのような場をつくりながら地域のコミュニティを再生しようと、一つの取組みをはじめました。

昔は地域の商店街には必ず八百屋さんがありました。ところが、今はスーパーで野菜を買うことの方が多いと思います。かつて泉大津駅より海側の地域は、商業の中心地として大変賑わっていましたが、現在商店街はシャッター通りと化し、八百屋は一軒もなくなってしまいました。地域のお年寄りは遠くのスーパーには行けないし、困っておられました。そこで、泉大津商工会議所さんと相談しまして、全国で初めて市の地域経済課を商工会議所内に移転して、まちづくり活性化の一環として商店街の活性化を進めました。その手はじめに八百屋を開店したんです。

どうやって八百屋をはじめたのか。泉大津市は和歌山県の日高川町と姉妹都市提携を結んでいますので、ここに目をつけました。日高川町が抱えている問題は住民の高齢化です。高齢化率は32.7%のまちです。一方で、ここは農業が盛んなところ。それならば、お年寄りの方がつくられた新鮮な野菜を泉大津の商店街で販売してはどうかと考えたのです。持ってきたのは、市場へは出荷できないような曲がったキュウリやヘチマみたいな規格外の野菜です。市場には出回りませんが、味は全くかわりません。むしろ朝どりなので新鮮でとてもおいしいんです。昨年6月30日、2トンの保冷車で朝どり野菜を持ってきて販売をはじめました。すると、地域の皆さんが大勢集まって売れに売れて、午前中で全て売り切ってしまいました。大成功だったわけです。これを毎週金曜日にやって、2～3か月ほど経ったところのことです。あいかわらず盛況な八百屋の向かいにある洋品店の売り上げがあがってきたんです。すると、洋品店の方も外に出て八百屋を手伝いながらさらに売り上げを伸ばしていきました。今度は福祉の部署が高齢者向けのサロンを八百屋の向かいに開いて、いつまでも元気な高齢者づくりの一環として体操教室をはじめました。これもなかなか盛況です。こうなれば、金曜日だけではなく、今年4月からは月曜日にもやりはじめました。これも成功です。高齢者向けの宅配もしてはどうかという話もでて、月曜日に限って宅配もはじめました。八百屋だけでは面白くないので、魚屋もやってはどうか、という声もあがってきて、現在、泉大津漁業協同組合の組合長とも話し合いをしているところです。

市の仕事は横断的にすることが大切です。地域経済も高齢福祉も子育て支援も、みんなが地域や市民と関わっていくことが地域コミュニティを進めていく基本です。それも大きなことをいうのではなくて、小さなことを一つ一つ大切に積み重ねていくことが大事なのです。



シェアショップ「風街」



私は陶芸をやっていますが、ロクロを挽く時には、センター（中心）がちゃんとしていると、大きな鉢でも難なく挽くことができます。先日、バラを生けるための花瓶をつくりましたが、上に細く長く挽こうとしたんですが、センターがずれてしまっていて、ロクロをまわすと上が振ってしまい、うまく伸ばすことができませんでした。つまり基礎は大切なんです。ほんの少し中心がズレても、先にいけばいくほどズレが大きくなってしまいます。一つ一つを大切に積み重ねていく、その繰り返しです。

行政と市民の皆さんが対話や行動を通じ、一つ一つのことを取り組んでいく中で、振り返れば安心・安全な地域コミュニティができあがっている、そのように進んでいくことが理想ではないかと思っています。

このように、地道な地域活性化をすすめているさなか、昨年8月25日、まちづくり活性化の広域的なミーティングに参加しました。商店街再生がなかなか成果がでないところが多い中で、大阪府下では泉大津市だけが活性化に成功しているとお褒めの言葉をいただきました。一緒にやっつけてくださっている日高川町でも、高齢者の生産意欲が湧いてきているというお話もありました。本当にうれしく思います。

日高川町とは、長年、泉大津市から農業体験やキャンプのイベントにうかがったりというような交流などを行ってききましたが、他所の地域と連携するというのは、泉大津市にとっても大変刺激になります。

泉大津市では昨年度から、桃山学院大学さんをはじめ近隣大学と包括連携を行っております。その関係で本日はこちらにおじゃまさせていただいております。大学がもっておられる知的資源や学生さんの若い力をお借りして地域活性化を進めたいと、そのように考えています。

例えば成人式ですが、一昨年からは企画・運営に大学生の方や新成人の方にも参加していただき、これまでとは違う式典を行うことができました。自分たちが自分たちのために、自ら創り上げる成人式です、とても清々しい、いい成人式になりました。この成人式には私の希望も一つ取り入れてもらいました。それは、壇上に上がるのはスピーチする人だけにしてほしいということでした。今までは来賓が壇上にズラッと並んで、誰が主人公かわかりませんでした。成人式の主人公は、もちろん新成人です。来賓の方には下に降りてもらい、新成人と同じ目線で壇上を見ていただくようにしました。今までの慣習にとらわれず、それでいて、しっかり地に足をつけた計画をたてることは必要です。そして、誰が主体者であるか、誰のためにしているのか、その視点を外してはいけません。

主体者ということは、私が市民の皆さんとお話しさせていただく際にもよく申し上げます。昨年、タウンミーティングを泉大津市内8か所で実施しました。今年は10か所を予定しております。そのタウンミーティングの中で私は市民の方に必ず、「住民ではなく、市民になってください」と申し上げております。自らが「市民」である自覚をもって、アクションをおこせる市民になってほしいという思いからです。そのために、駅前のテクスピア大阪というビルの中に市民活動センターも開設しました。

要望するだけの住民ではいけません。要望はもちろん必要ですし、行政として必要だと考えるものについては積極的に進めていかなければならないし、アピールも必要です。しかし、一人ひとりの方が泉大津市民として、市を良くするための行動をおこしていけば、自分たちの市に誇りももてるし、より良いまちになっていくことは間違いありません。

そういうことを訴えつづけておりますと、最近、少しずつ市民の皆さんと一緒にやって行く取組みが増えてきました。

例えば、学童保育です。泉大津市では仲よし学級とよんでおります。ここの教室の床を、子どもたちが座っても寝そべっても遊べるようにカーペットを敷きたいと思い、ある企業に相談をしました。泉大津市は予算が少ないので、少し協力してもらえませんか。全部で 15 教室ありまして、それらすべてにカーペットを敷くと大変費用がかかるのです。ところが、子どもたちの育成のために必要だということを、誠意を持ってお話しさせていただいたところ、なんと、全教室にカーペットを寄付してくださいました。大変ありがたいことでした。行政として予算がかからなかったからありがたいというよりも、子どもたちのために本当に心を砕いてくださったことが、とてもありがたく思ったのです。

また、地域の防犯活動も、泉大津市連合自治会の皆さんが、本当にボランティアで毎日汗をかいていただいております。防犯カメラの設置では、市からも半分補助金は出してはおりますが、とある企業さんがふるさと納税を活用して寄付してくださいました。

先ほど八百屋さんの話をいたしましたように、商工会議所さんも行政に協力し、オール泉大津という考えを共有していただいて、みんなで安心・安全のまちづくりを推進しています。セーフティーネットのハードルは高いですが、このように行政と市民が対話しながら、少しずつ、毛布のようなあたたかいまちづくりをすすめています。

◆毛布のまちの国際交流

伊藤 時代の変化に対応するためには、行政も市民も意識を変えなければいけないというお話をいたしました。これは泉大津市の内側からの改革です。変化は泉大津市だけでおこっているわけではありません。地域活性化のためには外の世界にも積極的に関わっていく必要があります。ここからは、海外との連携についてお話ししたいと思います。特に、セーフコミュニティをめざして活動する中で、泉大津という小さなまちでも、幅広く国際交流ができるんだということを知っていただければと思います。

泉大津には港があります。ここから中東やアセアンに向けて中古車が輸出されております。港を使っただくと、寄港する外国の船舶から「とん税」という税収が入りますから、泉大津市としては外国船がたくさん来てほしいのです。このトップセールスのために昨年10月、ベトナムのホーチミン市とバリア・ブンタウ省、ミャンマーのヤンゴン市へ行きました。ホーチミン市では、ホーチミン市長と、陶芸の話なども交えて長時間にわたる歓談をいたしました。帰国後の11月11日には、セールスの成果として、ベトナム総領事も出席して、バリア・ブンタウ省と経済協力に関する覚書を締結いたしました。このトップセールスでは、出発前に各方面へ声をかけましたが全く相手にされませんでした。ところが、これが時事通信を通じて世界中に配信されたことから、新しい予期せぬ展開が待っていました。JICA(国際協力機構)の所長からぜひ会いたいとお話をいただいたのです。実は、私も知らなかったんですが、ホーチミン市長はベトナム人民評議会のナンバー3でもある要人で、アポをとることも大変難しい人だそうなのです。そのような人と会談をしたものですから、時事通信が取り上げてくださり、JICAの所長がその記事を見られたということでした。JICAからは、「安心・安全のまちづくりを、世界に輸出しましょう」との話がありました。そうなれば職員を2~3年、東南アジアへ派遣することになるので、今は慎重に考えているところです。



バリア・ブンタウ省における経済協力に関する覚書調印式

また、昨年バルト3国の1つ、リトアニア共和国との交流をはじめました。泉大津とどのような関係があるのかということですが、この国は麻の産地なのです。泉大津は毛布を中心とした繊維産業のまちですから、ニットやマフラーの原料に麻を使います。そういうことで、泉大津商工会議所とミッションを組んでやってきたわけです。関空から毎日1便でているヘルシンキ行の飛行機に乗りまして、ヘルシンキで乗り換えて首都のヴィリニュスに到着します。そこからカウナスというまちへ行きました。

リトアニアの面積は北海道とほぼ同じです。日本の白石全権大使とリトアニアのメイルーナス特命全権大使のお2方がリトアニア滞在中、ご一緒に行動してくださいました。カウナスというまちは、第二次世界大戦中に杉原千畝在カウナス領事代理がユダヤ人に「命のヴィザ」を発給した地として知られています。今でも日本で亡くなったユダヤ人の子孫の方が、感謝をもって日本へ墓参にやってこられます。このような日本人が人道的な貢献をしたことを人権教育の中で伝えていくことの大切さを考えます。生きた人権教育ですね。

ところで、リトアニアでは様々なことを気付かされました。一つは車のマナーについてです。昨年7月に、泉大津市と高石市をつなぐ広い道路が完成しました。道路に信号機が少ないためか、「信号機をつけてほしい」という要望がありました。そしてリトアニアに行きますと、信号機がすごく少ないんですね。信号機も横断歩道もないところで道路を横断しようとする、走っていた車が停車するんですね。本当かなと思って、もう一度やってみましたが、やはり車が止まります。日本でも信号機のような機械に頼って社会生活をするのか、相手のことを考えマナーを守って社会生活をするのか、考えさせられました。

他にも日本と違う点がありました。それは、生活の仕方です。リトアニアの耕地面積は日本の約1/6で、ここでは小麦、大麦、ライ麦などが栽培されています。国土のほとんどが森林です。森の中にまちがある感じです。ロシアから分離してまだ25年ほどしか経ってないので、大きな看板のお店もない。看板はあるんですが、近くまで行かなければわからないほどです。日本に比べて自然が豊かで、みんながそれを守っている。日本での温暖化対策や環境教育の参考になると思いました。ぜひとも、カウナスと姉妹都市を結べないかと考えています。

今後の話しですが、WHOの国際会議がタイのナン県ナン市で開催されますが、私も出席を予定しております。バンコクからプロペラ機で2時間半飛んで、さらにそこから車でラオス近くまでまいります。セーフコミュニティは、全国1718市区町村のうち、現在10が認証を取得しております。順調にいけば泉大津市は来年10月末に認証が取れると思います。審査は他国のWHOがいたします。日本の場合は韓国のWHOが審査をします。認証されればいいですが、あくまで認証を得ることが目的ではありません。コミュニティの再構築、具体的な市民協働の推進、地域の活性化、そしてそのプロセスが大切なのです。それをしっかりやっていけば、おのずと認証はいただけると考えています。そのためにも世界との交流から学び、地域に還元することは大切だと思います。



訪問団とカウナス市内にて



カウナス市長表敬訪問・意見交換を行う両市長

◆未来に向けて

伊藤 最後に、どうして私が「安心・安全」のまちづくりをしたいのか、その考えがどこからでてきたのかについて少しお話しをして、まとめとさせていただきたいと思います。

最初、私は社会教育主事として仕事をし、その後、福祉の部署へ異動になりました。生活保護の担当として18年間ケースワーカーの仕事をいたしました。社会教育主事の際はプランニングの仕事をいろいろしたのですが、関わる人たちは全然違いました。ものすごくギャップを感じて、何度も「辞めよう」と思ったことがありました。しかし、今思えば、今の私があるのは、生活保護の担当として生活困窮者の方と一緒にやってきた経験が糧になっていることは間違いありません。今、市長という役職にはついていますが、経験を本当に思い出しながら仕事をしています。泉大津市にも生活困窮者がおられ、子育てに悩んでいる人も存在します。その部分を底上げしなければ、本当の安心・安全のまちにはならないのです。市民一人ひとりのパワーが伝わっていくような、市民どうしがもっと支えあえるような、そんなまちづくりをしていきたいのです。

いろんな問題があるのは事実です。医療費の増加、1,000人中約24人が生活保護で、そのうち約35%が高齢者世帯です。その対策として介護保険を安くして、障がい者へのタクシーチケットも障がいの部位によっては3・4級でも発給するようにしております。一つ一つの具体的な改善によって、市民に寄り添った行政サービスを心がけております。

私は、先ほども申し上げましたが、私たちが住む泉大津を今より住み良いまちにしたいのです。そして、そのためには行政も市民も主体者にならなければいけないと思っています。内外の様々な人たちとの交流を通じて、子育て世代も、子どもも、高齢者も、働く人も、みんな「住んでよかった」という安心・安全なまちづくりをめざしているのです。さらには、この泉大津のカラーを世界に発信し、異文化も取り入れた交流で泉大津を更なるプラスの方向に展開していきたいと考えています。海外交流の経験豊富な桃山学院大学さんとの連携は、そのための心強い味方であると思っています。ご清聴ありがとうございました。

生涯学習・スポーツ推進 3 大学連携事業

大阪体育大学
 桃山学院大学 × 泉大津市教育委員会
 プール学院大学

1. 大阪体育大学連携事業

大阪体育大学では、スポーツ教室を通じた活動を中心に連携事業を進めている。平成 27 年度は、昨年にひきつづいて市立総合体育館でのスポーツ教室、留守家庭児童会（なかよし学級）での体育遊び、学生によるウォーキングイベント「ライフ・チャレンジ・ザ・ウォーク」の運営、泉大津市成人式運営の学生ボランティア活動などが主な取組みである。

①スポーツ教室（総合体育館）

【子どもの部】			
教室名	回数	参加者数	概要
前期・後期ふれあい (2歳児～3歳児) ちゅらリッポ～たんぽぽクラス	各10	91	2歳児から3歳児の子どもと保護者を対象に、親子のふれあい遊びを通して、スキンシップを図りながら体を動かすことへの体験をさせる
子ども運動A-4	28	41	4歳児・5歳児、小学1年生・小学2～3年生の子どもを対象に、各年齢に応じた内容で遊びを多く含みながら体を動かし、基礎体力を向上させる
子ども運動A-5	28	42	
子ども運動B	28	40	
子ども運動C	28	40	
子どもバレーボール	56	29	小学4～6年生対象で、基礎からゲーム形式まで学ぶ
子ども器械体操	56	40	小学3～6年生対象で、基礎から学びそれぞれの種目の技を習得
子ども柔道	56	14	小学1～6年生対象で、礼儀・基礎動作から学び学年に応じた技を習得
【大人の部】			
教室名	回数	参加者数	概要
健康体操A	26	50	20歳以上の女性を対象に、日ごろのストレスや運動不足解消、体を動かしながら仲間づくりを行い健康維持・増進を図る
健康体操B	24	28	20歳以上の男性を対象に、ニュースポーツを含む様々なスポーツを体験することにより、仕事の疲れやストレスを解消、健康維持を図る
レディースバレーボール	26	21	基礎からはじめてゲーム形式まで習得、初心者大歓迎
実生運動	26	40	体塊と軽運動
卓球	26	31	15歳以上の男女(中学生を除く)、初心者大歓迎
民謡	26	30	民謡、フォークダンス、初心者大歓迎
短期スポーツ教室(総合体育館)			
教室名	回数	参加者数	概要
短期バドミントン(2期実施)	8	40	学年に応じて基礎から学びゲーム形式まで習得
短期トータルトレーニング(3期実施)	9	30	学年に応じて楽しみながら多種多様な動きを習得し基礎体力を向上させる
短期ていとま(び箱・てつぽうコース)	16	102	2部制で実施し、各種目の基礎を習得
3day教室(3期実施)	9	14	火事・育児・仕事で体を動かす機会のない人を対象に3日間違うダンスを体験しリフレッシュできるよう実施

②体育遊び（市内各小学校なかよし学級）

【夏休み中よし学級体育遊び】						
No.	日程	曜日	時間	会場	参加人数	内容
1	7月28日	火	10時～11時	菟小学校	44人	ドッジボール
2	7月28日	火	13時30分～14時30分	桶小学校	74人	ドッジボール
3	8月4日	火	10時～11時	浜小学校	36人	ドッジボール
4	8月4日	火	13時30分～14時30分	泉南小学校	68人	ドッジボール
5	8月6日	木	10時～11時	上條小学校	57人	ドッジボール
6	8月11日	火	10時～11時	泉東小学校	46人	ドッジボール
7	8月18日	火	13時30分～14時30分	穴師小学校	46人	ドッジボール
8	8月26日	水	13時30分～14時30分	旭小学校	62人	ドッジボール
【冬休み中よし学級体育遊び】						
No.	日程	曜日	時間	会場	参加人数	内容
1	12月10日	木	14時～15時	泉南小学校体育館	78人	鬼ごっこ・大縄とび
2	12月16日	木	14時～15時	浜小学校体育館	39人	鬼ごっこ・大縄とび
3	12月17日	木	14時～15時	桶小学校体育館	78人	鬼ごっこ・大縄とび
4	1月5日	火	10時～11時	旭小学校体育館	65人	鬼ごっこ・大縄とび
5	1月5日	火	14時～15時	上條小学校体育館	32人	鬼ごっこ・大縄とび
6	1月6日	水	10時～11時	泉東小学校体育館	60人	鬼ごっこ・大縄とび
7	1月6日	水	14時～15時	穴師小学校体育館	30人	鬼ごっこ・大縄とび
8	1月7日	木	14時～15時	菟小学校体育館	23人	鬼ごっこ・大縄とび

③ライフ・チャレンジ・ザ・ウォーク

概要：小学生から一般男女・親子（幼児を含む）まで参加者が地図を参考に約半日、市内各所を歩きながらコミュニケーションを図るとともに、歩く楽しさを味わう。

日時：平成 27 年 5 月 24 日（日）

参加者数：445 人

④学生ボランティア活動

概要：平成 27 年度市民体育祭及び平成 28 年成人式において、企画・運営ボランティアとして大学生が参加した。

市民体育祭：平成 27 年 11 月 8 日（日）開催。参加者数 600 人

成人式：平成 28 年 1 月 11 日（祝）開催。新成人 818 人



体育遊び



ライフ・チャレンジ・ザ・ウォーク

⑤おおつっこ講座

概要：子どもにとって『あそび』とは何か？なぜ『あそび』が大切か？たくさん遊ぶとどんな効果があるのか？親子一緒に体を動かしながら、遊びを通じて年齢ごとの身体発育等を学び、生活に役立てる。

第1回 平成28年2月16日（火）参加者数28人（14組）

第2回 平成28年2月27日（土）参加者数10人（5組）

第3回 平成28年3月6日（日）参加者数16人（8組）



おおつっこ講座

2. 桃山学院大学連携事業

博物館連携を軸にはじまった桃山学院大学連携事業は、桃山エクステンション・カレッジへの泉大津市職員等の参加、戦争体験調査の実施、企画展・講演会の開催、大学祭（桃山祭）での協同展示ブースの開設、地域博物館における多言語化事業など、博物館連携の深化に加え、既存の枠組を超えた広がりもみせた。ここでは、別頁で紹介した桃山エクステンション・カレッジ及び企画展・講演会を除いた連携事業について報告する。

①戦争体験調査「学生たちと学ぶ戦争の記憶」

第二次世界大戦終結70年にあたって、戦争体験を記録し後世に伝えることを目的に実施した。調査は井上敏准教授指導のもと学生及び泉大津市職員合同で、平成27年6月から8月にかけて12人の方から採話した。調査内容は戦時下の生活、空襲、原爆、満州引揚げ、戦後の苦勞、疎開など多方面にわたった。調査結果は調査報告書『学生たちと学ぶ戦争の記憶』としてまとめ、泉大津市役所及び桃山学院大学にて配布した。

②桃山祭協働展示ブースの開設

2015年第55回桃山祭において、桃山学院大学、泉大津市、和泉市が協働で、桃山学院史料室のメンバーの全面的な協力を得ながら、地域大学連携事業ブース「地域とつながろう桃山学院大学～泉大津市・和泉市とともに～」を開催した。主に、連携事業をパネルで紹介し、泉大津の地域グッズ販売等を行った。11月13日（金）～15日（日）の3日間、桃山学院大学1号館1-313を会場とし、期間中約500人の来場があった。初日の11月13日（金）には、泉大津市マスコットキャラクター「おづみん」がオープニングセレモニーにも登場し、人気を博した。

③地域博物館における多言語化事業

泉大津市の文化財を年々増加している来日外国人にPRするため、市内に2か所ある展示施設（池上曾根弥生学習館・織編館）の展示案内を外国語表記にする事業を、桃山学院大学国際センターと連携し実施した。展示案内パンフレット、展示品キャプションの翻訳と、展示解説の音声ガイダンスの音声吹き込みを桃山学院大学に在籍する留学生らが担当し、英語・韓国語・中国語の展示案内を作成した。

④英語で遊ぼう（放課後子ども教室での取組み）

文部科学省の放課後子ども総合プランにもとづいて、大学教員及び学生を講師にまねいた英語に親しむための活動を、市内小学校8校で各1回実施した。所要時間は90分で、英語のゲームや歌などのプログラムを行った。



英語で遊ぼう

④桃山学院史料室紀要『桃山学院年史紀要』35号記事掲載

桃山学院史料室が毎年発行している研究紀要に、泉大津市との地域連携事業成果が2点掲載された。1点は、「泉大津市・桃山学院史料室連携事業報告～博物館連携を中心として～」と題し、平成26～27年度実施の企画展・講演会等について、報告と評価を行った。もう1点は「泉大津における奉安施設－真影奉斎の一事例－」と題する報告で、企画展「戦争が残したもの」及び戦争体験調査で取り上げることができなかった調査資料に焦点をあてたものである。いずれも泉大津市が連携事業の目的の一つである「大学の持つ知的資源の活用」がもたらした所産であり、その成果が桃山学院史料室の紀要に掲載されることは、意義あるものといえる。

3. プール学院大学連携事業

平成26年度にひきつづき公民館活動の一環として「エンジョイそと遊び」を継続する一方、新たな取組みとして、地域大学コンソーシアム事業を実施した。

①エンジョイそと遊びⅡ・Ⅲ～

子どもの「遊び」に関わる大人の役割を学ぶための講座として、泉大津市立北公民館及び南公民館で実施した。

Ⅱこどもの遊びに関わる大人の役割 7月14日(火)・7月24日(金) 参加者数10人

Ⅲめざせ「遊び」のオピニオンリーダー！ 9月15日(火)・9月18日(金) 参加者数10人

②地域大学コンソーシアム事業

南大阪地域大学コンソーシアムの単位互換制度の一環として、プール学院大学が幹事校となり、まちづくりの企画体験ができる実践学習・科目「地域理解」を開講した。内容は、植野雄司、上田慎二、平井拓己を担当教員とし、「地方自治と行政施策のあり方について理解する」「住民自治の理念を理解し市民的資質を身につける」「地域社会の発展のために貢献できる」を到達目標とした4日間集中授業であった。

第1回 11月14日(土)「イントロダクショ～課題設定」テクスピア大阪

第2回 12月6日(日)「フィールドワークⅠ～講演」泉大津市民会館

第3回 12月12日(土)「フィールドワークⅡ～消費者教育イベントの準備」泉大津市民会館

第4回 12月13日(日)「まちづくり実習～消費者教育イベント」泉大津中央商店街・泉大津市民会館

子どもの「遊び」に関わる
大人の役割を学びませんか？
めざせ「遊び」のオピニオンリーダー！



【開催日時・場所(内容は同じです)】
南公民館 9月15日(火)
北公民館 9月18日(金)
いずれも午前10時～正午
一時保育(6か月～未就学児、先着各10人。
1週間前までに受講する公民館へお申し込みください)
【講師】川口 裕之氏
(プール学院大学非常勤講師、NPO法人Kid's ぽけっと、
ビッグバン敷地内野外冒険遊び推進スタッフ)

【受講料】無料
【定員】各30人(定員に足りなかった場合は)
【申込】受講を希望される公民館窓口または電話でお申し込みください
南公民館：電話33-1764 北公民館：電話23-0506
【問合せ】生涯学習課(市役所3階) 電話33-1131



エンジョイそと遊びⅢ



地域大学コンソーシアム事業

エンジョイそと遊びⅢちらし

企画展・講演会

「戦争が残したもの」「戦争がもたらしたもの」 「真田伝説―泉大津に伝わる真田幸村・後藤又兵衛―」

桃山学院史料室 × 市立織編館

はじめに

本年度の地域大学連携事業は、第二次世界大戦終結 70 年・日露戦争終結 110 年記念企画展「戦争が残したもの」及び企画展「真田伝説」を開催した。また、企画展関連講演会として「戦争がもたらしたもの」(全 2 回)を展示期間中に開催した。

●企画展 「戦争が残したもの」

◆桃山学院大学会場

日露戦争を中心に展示を行った。

平成 27 年 6 月 24 日(水)～11 月 17 日(火)

学院史料展示コーナー(桃山学院大学聖ペテロ館 2 階)

入館者数約 600 人

◆泉大津市会場

第二次世界大戦を中心に展示を行った。

平成 27 年 7 月 16 日(木)～8 月 3 日(月)

織編館ギャラリー(テクスピア大阪 1 階)

入館者数 301 人

●講演会「戦争がもたらしたもの」(全 2 回)

◆「日露戦争とキリスト教」

キリスト教が戦争とどう関わったかを、主に桃山学院及び聖公会を事例として、発表した。

平成 27 年 7 月 18 日(土)10:00～11:30

講師：西口 忠(桃山学院史料室)

参加者数 23 人

◆「旧制中学校と戦争」

旧制中学校が戦争とどう関わったかを、主に旧制桃山中学校を事例として、発表した。

平成 27 年 7 月 25 日(土)10:00～11:30

講師：玉置 栄二(桃山学院史料室)

参加者数 18 人



桃山学院史料展示コーナー



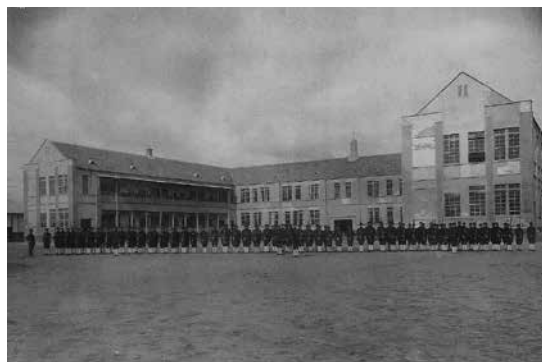
講演会「日露戦争とキリスト教」



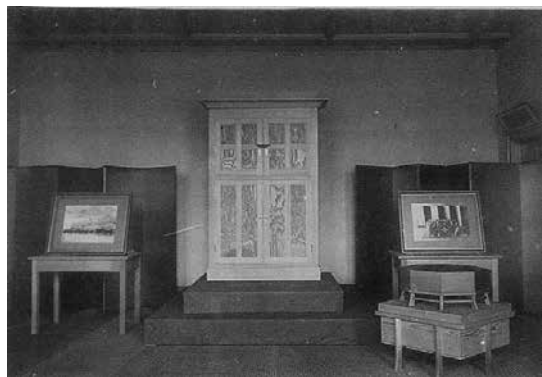
講演会「旧制中学校と戦争」

はじめに ー旧制桃山中学校についてー

- I 中学校における軍事教練のはじまり (1886 年)
 1. 『高等英学校規則』に見る兵式体操
 2. 軍事教育：戦前の学校教育の大きな特色の一つ
 3. 軍事教練（兵式体操）のはじまり
 4. 森有礼と兵式体操
 5. 中学校における兵式体操
- II 大阪府下の中学校への兵式体操の導入
 1. 大阪府の通牒
 2. 明治期の大阪府下の中学校
 3. 北野中学校の場合
- III 桃山中学校の誕生と徴兵制
 1. 高等英学校が文部省の認可を目指した理由
 2. 徴兵の猶予・在学期間の短縮
- IV 桃山中学校の兵式体操用銃の払下げ
 1. 「廃用銃器払下願」
 2. 武器庫
- V 日露戦争の影響
 1. 日露戦争
 2. 戦後の日本社会への影響
 3. 学校への影響
- VI 兵式体操から教練へ (1913 年～)
 1. 「学校体操教授要目」 1913 (大正 2) 年 1 月 28 日制定
 2. 日露戦争と一年志願兵 (1904 年～ 1905 年)
- VII 大阪における軍事教練改善の取り組み (1913 年～ 1915 年)
 1. 陸軍の動き
 2. 大阪府中学校長会義の動き
 3. 大阪府の動き
 4. 中学校の動き
- VIII 陸軍特別大演習 (1914 年)
 1. 陸軍特別大演習
 2. 大正天皇の来校
 3. 御真影
- IX 教練から学校教練へ 陸軍現役将校の配属 (～ 1925 年)
 1. 「陸軍現役将校学校配属令」 勅令第 135 号、
1925 (大正 14) 年 4 月 11 日
 2. 「陸軍現役将校学校配属令」施行までの経過
- X 大阪府中等学校第 1 回連合演習 (1929 年)
- X I 大阪府中等学校校外教護連盟 (1929 年)
 1. 設立理由
 2. 北野中学校
- X II 満州事変から太平洋戦争開戦まで (1931 年～ 1941 年)
 1. 満州事変 1931 (昭和 6) 年 9 月勃発。戦時体制に突入り、日中戦争へと拡大
 2. 日中戦争の頃 1937 (昭和 12) 年 7 月～
- X III 太平洋戦争下の学校 (1941 年～)
 1. 開戦日当日 (12 月 8 日) の様子
 2. 「中学校令」 1943 (昭和 18) 年 1 月
 3. 勤労働員の強化
 4. 「決戦教育措置要綱」 1945 (昭和 20) 年 3 月 18 日
- X IV 大阪大空襲 (1945 年)
 1. 中学校の空襲被害
 2. 「昭和 20 年度中等学校入学許可二関スル件」 1945 (昭和 20) 年 3 月 15 日
 3. 罹災後の桃山中学校
 4. 生徒の回想 桃山中学校



桃山中学校での兵式体操



桃山中学校の御座所と奉安殿



桃山中学校の被災木造校舎

●企画展 「真田伝説—泉大津に伝わる真田幸村・後藤又兵衛—」

大坂の陣 400 年を記念し、かつて泉大津の特産品であった真田紐、真田紐の考案者と伝わる真田幸村、その製法を泉大津へ伝えたと言われる後藤又兵衛に焦点をあてた展示を、真田紐のように丈夫で切れることのない地域大学連携事業の発展を祈念して実施した。展示では、泉大津ふるさと文化遺産伝統的技術保持者の指導・協力により製織された真田軍旗及び陣幕をはじめ、地域資料や講談本を展示した。

◆泉大津市会場

平成 27 年 12 月 17 日 (木)～平成 28 年 1 月 11 日 (月)

織編館ギャラリー (テクスピア大阪 1 階)

入館者数 324 人

◆桃山学院大学会場

平成 28 年 1 月 15 日 (金)～2 月 23 日 (火)

※好評のため期間を 3 月 11 日 (金) まで延長

学院史料展示コーナー (桃山学院大学聖ペテロ館 2 階)

入館者数約 500 人



織編館ギャラリー展示



広報ポスター



桃山学院史料展示コーナー展示

◆展示資料一覧

展示資料名	年代	数量
真田軍旗	平成27年製作	5本
真田陣幕	平成27年製作	1枚
真田紐	平成4年収集	数点
京都の真田紐	平成4年収集	数点
伊豆諸島の真田紐	平成4年収集	数点
真田幸村の謀略(映画パンフレット)	昭和54年	1冊
真田幸村 逸伝(佐助)(立川文庫傑作集1)	昭和56年	1冊
忍術猿飛佐助 真田十勇士(赤本)	昭和20年代	1冊
新説真田幸村	昭和27年	1冊
真田幸村(渡村巖書5)	明治41年	1冊
侍将 真田幸村	昭和19年	1冊
長篇講談後藤又兵衛真勇伝	大正14年	1冊
真田三勇士 逸伝名人 猿飛佐助 名著復刻	昭和46年	1冊
真田幸村(信濃漫士叢書5)	昭和4年	1冊
日本勇者物語(日本児童文庫37)	昭和3年	1冊
真田幸村(少年講談全集14)	昭和32年	1冊
少年講談 後藤又兵衛	昭和12年	1冊
豪傑 後藤又兵衛 痛快時代長篇まんが	昭和29年	1冊
後藤又兵衛(少年講談全集9)	昭和30年	1冊
武蔵・又兵衛-兵庫の剣豪たち-	昭和38年	1冊
関原真紀大成.6	江戸時代	1冊
武林伝.1	江戸時代	1冊

※展示内容は予告なく変更する場合があります

平成27年度
泉大津市・桃山学院大学連携事業



大坂の陣
400年下へ繋ぐ

真田幸村

真田幸村に伝わる
後藤又兵衛

平成27年12月17日(土)～平成28年1月11日(日)
泉大津市立中央公民館
TEL 0723-31-4143
10:00～17:00(入場は16:30まで) ※休館日 12/29～1/3(休)

平成28年1月15日(金)～2月23日(火)
桃山学院大学 学院史資料展示コーナー
大津市大津区南3丁目1-1 桃山学院大学 7～9号館2階
TEL 0723-34-2121
9:00～17:00(入場は16:30まで) ※土・日・祭日休館

主催 泉大津市教育委員会
桃山学院大学



真田軍旗・陣幕を継ぐ
本展では、泉大津ふるさと文化遺産伝統的技術保持者の白野英樹氏の指導・製作協力で、仮の真田軍旗と木綿の陣幕を再現しました。用いた素材は、経糸を上下させるための綜糸を、上記のシャカード装置で制御するドビー機械です。通常のドビー機械は動力を用いた力機械ですが、今回使用したものは白野氏オリジナルの機構で、手廻りの技術をいかした繊細な色合いに仕上がりました。

企画展
真田伝説～泉大津に伝わる真田幸村・後藤又兵衛～

平成27年度 泉大津市・桃山学院大学連携事業

編集・発行 泉大津市教育委員会
〒596-8386 大阪府泉大津市東豊町9-12 電話0725-33-1431(代)
桃山学院大学
〒594-1196 大阪府泉大津市まなび野1-1 電話0725-54-3131(代)

発行日 2015年12月17日
印刷 株式会社昭野社




泉大津の地域産業として全国に知られる毛布産業は、江戸時代に栄えた木綿産業から始まりました。とりわけ真田紐は、泉大津を代表する総織物として、盛んに製織されました。

真田紐の考案者は、真田幸村といわれます。幸村は大坂の陣に備え、刀の下の緒などに使う丈夫な真田紐をつくり、その製法が後藤又兵衛へ伝えられたといわれています。又兵衛は、九尾山に隠棲していた幸村へ大坂の情報を収集し伝達するため、一時期、大坂と九尾山の中間にある泉大津に逗留していました。地元では、その時に又兵衛が真田紐の製法を泉大津へ伝えたと、伝承してきました。

本展では、大坂の陣 400 年を記念し、地域大学連携事業の一環として、真田紐をめぐる文化と伝承に焦点をあてました。真田紐のように丈夫で切れることのない地域大学連携が、地域文化の発展に寄与することを祈念いたします。

本展開催にあたり、軍旗・陣幕製造のご指導と制作協力をお願いした白野英樹氏(泉大津ふるさと文化遺産 伝統的技術保持者)をはじめ、ご支援・ご協力いただきました皆さまに、厚くお礼申し上げます。

泉大津市教育委員会・桃山学院大学

真田紐を考案した？真田幸村・幸村

真田幸村
名は信業。真田昌幸の次男。信濃でできる史料では幸村と稱していない。真田氏は信濃国小県郡を本拠とする譜系で、戦国時代は真田信玄に属した。信玄の死で幸村は昌幸とともに信玄に属し徳川秀忠の西上を阻止したため、信濃九尾山へ登壇させられた。大坂夏の陣では豊臣方として大坂城出陣の真田丸を率いて節制したが、夏の陣で松平忠直の軍と激戦の末戦死した。名指として、戦記文や講談等に数多く取り上げられてきた。

『真田幸村』(渡村巖書5) 口絵
成泉堂発行。明治41年(1908) 左久良書房刊。22.5×15.8cm。224頁。講談漫筆は明治時代の小説家。新編小説をはじめ、歴史小説や評論など著作多数。口絵文庫は全11巻で、本書はその第5巻。

『真田幸村』(少年講談全集14) カバー
昭和32年(1957) 大日本児童会講談社刊。18.6×13.3cm。254頁。九尾山登壇から夏の陣にいたる幸村の活躍を描く。大日本児童会は、株式会社講談社の前身。カバー絵は時代小説の挿絵で知られる木塚清史の作。

立川文庫
『真田三勇士 逸伝名人 猿飛佐助』口絵
山口樵主人作。大正3年(1914) 立川文庫刊。19.8×14.0cm。444頁。猿入。真田十勇士の一人、猿飛佐助の活躍を描く。立川文庫は主に大正期にブームになった講談本のシリーズ。

赤本
『忍術猿飛佐助 真田十勇士』表紙
作野不郎。昭和20年代原書堂刊。12.8×17.8cm。24頁。講談を題材とした漫画本は、表紙に赤色が多く用いられ、「赤本」とよばれた。

泉大津の特産品だった真田紐

真田紐
経糸に比べ緯糸を多く入れることによりつくられた、厚みのある丈夫な平織物。刃の下げ袖、袖紐、袴紐、帯締め、帯揚げなど幅広く用いられる。江戸時代に高さを争った安芸織物(今や愛媛県)には、九尾山に隠居した真田昌幸所有の各刀正宗の柄を木綿の糸で織りこんだことから「真田」といわれるようになったとある。また、平田無類は「古史記」の中で黒屋大人(真田昌幸)の器として「我之織(さのはた)」の戦記としている。

真田紐の産地
『泉大津市史』より
岡山倉敷市北見町にある田の口地区は、江戸中期頃から真田紐の産地であった。真宗御霊祭の古刹として知られる由山蓮花寺の門前では、この地域で製織された真田紐を販売する商家がみられ、『金比呂参詣名所図会』にも描かれている。福山では近代にラップの製造がはじまったが、その技術は泉大津へもたらされ、真田製織厂取り入れられることになる。

泉大津でつくられた真田紐
泉大津では、大津町内を中心とした地域で江戸時代から製織されてきた。この地に真田紐を伝えたのは、真田幸村と親交のあった後藤又兵衛と伝わる。一力として17世紀後半、旗で真田紐を学ぶ泉大津へ伝えられた人物として河合又兵衛の名も伝承されている。天保14年(1843)の記録には、手多津村の真兵衛という人物が23人の旅人を招いて真田製織機を動かすこととなり、真田が地域の暮らしを支える産業であったことがわかる。天保年間には真田又兵衛という人物が、地域に真田紐の技術を伝へ、節制していた民衆救済を行ったとも伝わる。

本田清七郎と栗ノ木(左) 清七郎が改良した真田製機(右)
写真家本田清七郎が写した伝説。泉大津の真田製機製造者小川平助が写山山で導入したラップ製織機を、福山から運ばれた本田清七郎が改良し、明治23年(1890) 真田製機が完成した。本田が改良した製機は、小機は25本、大機は60本を同時に織ることができたため、手廻りで織られていた同業者に衝撃をあたらせたという。泉大津の真田製機は昭和初期までつづいた。

小川平助
各地に残る真田紐
京都、伊豆諸島、沖縄など、日本各地でその技術が伝承されている。

京都の真田紐 **伊豆諸島の真田紐**

泉大津へ真田紐を伝えた？後藤又兵衛

後藤又兵衛(昭和3年刊『日本通俗人物』より)
名は基次。戦国時代の武将。黒田孝高、長政父子に仕え、豊臣秀吉の九州平定や文禄・慶長の役で活躍した。関ヶ原合戦後、黒田家を出陣した。大坂夏の陣では豊臣方として大坂城へ入城。大坂夏の陣で戦死したが、河内国津守寺で戦死。豊臣として戦記文や講談に数多く登場する。泉大津では、真田紐を伝えた人物との伝承があり、子孫を称する家系も存在する。

後藤又兵衛基次の碑
和歌山県玉手山公園内
元和元年(1615)の大坂夏の陣で真田地となった和歌山県玉手山公園内に建つ。後藤又兵衛は和歌山県片山町で没したとされ、碑の裏には又兵衛の家臣が介錯を行った後自決したという古く武右衛門の碑もある。

後藤又兵衛が宿願を遂げた「酒屋
昭和7年(1932) 嶋さんの「大兵衛志」には、泉大津に逗留中の後藤又兵衛が、酒の店に入り込んで酒造りを学んだが、酒屋の専業主婦に紹介されたという。現地の西宮町にありたとされる。類話いろいろの講談本にもみられる。

『少年講談 後藤又兵衛』
高木義興編。昭和12年(1937) 大日本児童会講談社刊。19.2×13.4cm。371頁。後藤又兵衛の少年時代から夏の陣後までを描く。挿絵は額戸浩。

『後藤又兵衛』(少年講談全集9)
昭和30年(1955) 大日本児童会講談社刊。18.7×13.5cm。42頁。少年期から大坂城入城までを描く。口絵、挿絵は矢島龍三。

『痛快時代長篇まんが 豪傑後藤又兵衛』
田中ちかお作。昭和29年(1954) 小学館刊。『中学生の友』12月号付録。18.1×12.7cm。130頁。名指「日本男」をめぐって後藤又兵衛と少年の交流を描く。

対談

行政と大学がタッグを組むⅡ ～地域と大学の未来と可能性～

富山 浩三（大阪体育大学教授）

富田 明德（泉大津市教育委員会教育長）

司会 大塚 和弘（泉大津市教育委員会事務局）

はじめに

平成 25 年度からはじまった泉大津市と大阪体育大学との連携事業は 2 年目を迎えた。これまでの事業を踏まえつつ新たな取組みに向けた展開について、大阪体育大学教授で泉大津市社会教育委員の富山浩三と、泉大津市教育委員会教育長の富田明德が、両事務局を代表して対談を行った。対談は「行政と大学がタッグを組むⅡ～地域と大学の未来と可能性～」と題し、平成 27 年 8 月 24 日、泉大津市役所教育長室にて午前 10 時から約 2 時間にわたり実施した。本稿はその報告である。



富山教授



富田教育長

1. 連携事業の現状と課題

大塚 昨年度から大学連携事業がスタートしています。大阪体育大学については、スポーツ分野で人的連携として、職員を派遣してスポーツ教室の企画・運営、学童保育、本市でいうと仲よし学級で、体育遊びの企画・運営を実施しています。まずは、教育長から連携事業についての、評価と課題をおうかがいします。

富田 スポーツ教室の実施、学童保育での体育遊びは、全校で実施していただいております。成果を挙げていただいております。専門のラグビーなどの種目を生かし、我々の発想ではないところで成果が挙げられていると思います。きっかけとしては非常におもしろい。課題としては、市が事業をコーディネートできているのか、派遣職員には市が何を求めているのかを示しているのか、またその職員のノウハウを生かしているのか、うまく支えていっているのか、うまくマッチできているのか、それらのことを心配しています。

富山 スポーツ分野の連携事業では臨時職員として 1 人採用いただき、昨年からは学童保育などで活動していると聞いています。体育大学の卒業生が指導にあたり、非常に効果があると思います。学童保育も、部屋の中で過ごすのではなく、小学生ですので、体を動かしスポーツすることは重要であり、全国的にもそのようなプログラムが増えています。泉大津市でも、これができるようになったことはいいことです。課題としては、大学の手を離れているので、現場でどのように動いているのか、良くも悪くも活動内容を大学がうまく把握することです。

大塚 昨年度行ったスポーツ教室・学童保育での、体育遊びでは、富山先生に実施報告書を書いていただき、2極化する子どものスポーツの実態にアプローチができて、との評価をいただきました。スポーツをする子、しない子に2極化している現状について、考えをお聞かせください。

富田 本市の場合、部活動は盛んであるので、運動をする子はしています。しかし全体としては、全国体力テストでは全国平均を下回っています。学力も同じだが、2極化が進んでいるイメージは持っています。運動に接点のない子は、どのように運動の場を提供できるのかという点は、先ほどお話しがあったように学童保育での場面などで、誘導していくことがすごく大事だと思います。

富山 部活動では運動をしようとする子が入っているので、2極化でいえば「運動する子どもたち」に入ります。学童保育では、スポーツとはあまり縁のない子たちといえます。学童保育の活動にスポーツを取り入れることは、やっていないほうの子どもたちに体を動かすという環境があるということで、非常に良いことだと思います。それを引っ張っていきける人間が、大阪体育大学から派遣できているということは、連携事業として意味のあることだと思います。

2. 地域スポーツのあり方と理想像

大塚 話はかわりますが、地域スポーツの在り方、理想像をお聞かせください。

富山 最近よく言われるようになりましたが、スポーツが文化として常に存在していて、日常生活の中にスポーツがあって当たり前という状況ができればと思います。「スポーツをしに行こう」と、日常と切り離してスポーツをするのではなく、スポーツをすること自体が当たり前で、ジョギングをしたり、ウォーキングをしたり、生活の中でスポーツが普通に存在している。大人から子どもまで、親がスポーツをし

ているので、子どもがスポーツをするのが当たり前になることが理想です。スポーツを阻害する要因の多くは、時間がない、機会がないというものですが、「時間がないのは気がない証拠」です。本当に好きならば時間を作り、融通してでも体を動かすことになると思います。そういうきっかけを、この連携事業で提供していきたいと思います。

富田 まさにスポーツは文化で、町づくりという観点からしても、非常に有効な手段であると思います。おそらく健康増進が図られると、それによって財政的にも介護問題なども解決できると思うし、潜在的にもプラスです。スポーツを通じた地域のきずなづくりができます。本市には、いろいろなスポーツ団体、競技団体があって、皆さん仲良く楽しんでいる。スポーツと文化的な活動が生きがいになって、町が健全に進んでいる。その前段階として、子どもたちもスポーツと文化に接する機会があり、そういう仕組み作りができないかと思います。子どもたちの健全育成には、当然スポーツは効果がある。子どもの時に、スポーツや文化に触れた子どもたちが、働く世代になって、仕事などで一時地域を離れたのち、地域に戻ってきた時に文化の担い手になってもらえれば、良い町づくりができると思いますし、そういうことが進めばもっといいまちになっていくと思います。

富山 スポーツ振興という意味では、スポーツは文化であって、生活の中に当たり前のようにスポーツを楽しめるというような考え方を持っていただきたいと思います。スポーツを通しての地域振興という視点は、教育長さんがおっしゃるとおり、まちが抱える多くの問題の大部分がスポーツを通して解決ができるのではないか、と注目が集まっています。また、この秋にスポーツ庁ができるというのは、まさに、そこへの認識が世の中で高まっているからではないかと思います。例えば、セーフコミュニティをめざす泉大津市としても、スポーツを通して安全・安心なまちづくりができるとか、医療費の問題、子

どもの健全育成にしても、スポーツを通しての視点が出てきていると感じています。スポーツ振興と地域振興は、両面で並行して進めていくことができると思います。

大塚 スポーツは文化であって、まちづくりにも寄与できるというお二人の考え方ですが、そこで教育長におうかがいしますが、その理想を泉大津市で進めていくとすれば、現状、理想に対する課題はありますか。

富田 スポーツ施設が十分なのかという課題があります。体育館を今度改修しようとしていますが、施設・ハード面、プールはどうなのか、現在、内部で検討をしています。ハード面が全体的に老朽化してきているという大きな問題がひとつあります。これは、泉大津市だけではないかもしれません。それともうひとつ、担い手の問題があります。先ほども申し上げましたが、トップアスリートとして活躍している方もそうでない方も、皆さんがスポーツに親しんでいるのかということになると、今はちょっとその環境にないのではないかと思います。依然として競技団体頼みで、本当にそれで大丈夫なのかというイメージがあります。トータルでの目標が十分でないかもしれないと思います。

大塚 富山先生はいろんなスポーツ振興に関わられる中で、いろんな地域事業に携わることも多いかと思いますが、教育長のお話にもあったスポーツ推進の担い手の問題は、いろんな地域においても課題としてあるものなのではないでしょうか。

富山 スポーツ推進の担い手については、理想的には市民の中から新しい人が自主的に進めていくこと、市民の中から芽が出て、そこが担っていただくのが良いと思います。ただ、現実的には、総合型地域スポーツクラブの設立の準備を進めていく中で、世代交代や、特定の人に負担が集中している点が見えてきま

した。これは泉大津市さんだけの問題ではなく日本中であることだと思いますが、市民の中で主体的にといながら、いざ手を挙げた人にいろんな負担がかかると、長続きしないことになります。また、その人がいなくなったら仕組み自体が成り立たなくなる。そこで、ある程度責任を持てる行政職員や仕事としてやれる人が入った仕組みを作ることが重要です。そういった人がコーディネートし全体の仕組みを回していくことが前提となって、市民ボランティアを活用したり、実際にスポーツをしている人たちの力を借りるとすることは十分あり得ると思います。プロのコーディネートは必要だと思います。

大塚 富山先生のお話の中で、総合型地域スポーツクラブというフレーズがありました。これは、国のスポーツ振興基本計画の中で、各市町村に少なくともひとつ置くことありますが、現在のスポーツ振興計画にも継承され、泉大津市では、第4次総合計画の中でもその創設を位置付けています。4月からは、富山先生のご協力で泉大津市でも設立検討会議が始まっています。子どものスポーツの2極化の問題では、子どもの時にスポーツをしない子は大人になってもしない人が多いといわれます。子どもの時からスポーツに携わる機会を提供するツールとして総合型地域スポーツクラブを導入した自治体がある中で、泉大津市でも検討段階に入っていますが、教育長のお考えはいかがでしょうか。

3. 総合型地域スポーツクラブの考え方

富田 総合型地域スポーツクラブの考え方は決して新しいものではなく、なぜその考え方が広がらないのかと思っています。私は平成13年に大阪府の教育委員会で社会教育部門にいました。そのころは、いろいろなところで総合型地域スポーツクラブの理想的なところについて話をしていました。しかし、大阪府内では今もあまり広がっていません。なぜ広がらないのでしょうか。

富山 総合型クラブの事業が始まってから、日本中でどんどん設立されましたが、どんどん成果をあげているというわけではありません。現実には難しいところもあると思います。しかし、全国的にみれば成功事例もあると思います。成功しているところと、そうでないところを見ると、総合型クラブを運営していく求心力があるとか、核になる人がいるところについてはうまくいっていると思います。ところが、「各市区町村でひとつは必要」といわれたので、とりあえずつくったところは、失敗とはいえないまでも、現状のまま変わっていません。やはり、求心力のある人やプロフェッショナルな人が必要です。クラブアドバイザー資格にしても、プロフェッショナルを養成するという思いで始まっていますので、人材育成への期待は大きいと思います。最近、NPO 法人などのサッカー教室などがずいぶん増えてきました。やり方をきちんとやれば、参加費をとって組織を作り、自分の給料をそこからねん出するというやり方は可能だと思います。そういう意味では、キャッシュフローを生み出せるような、経済効果をきちんと示せるような、そんなクラブづくりが求められていると思います。

富田 いわゆるキャッシュフローを生み出して、ある意味商売が成り立つということになると、われわれ行政職員はノウハウが十分でないので、委託事業として体育館の運営を民間事業者任せることになってしまわないでしょうか。総合型スポーツクラブの運営を民間事業者任せしている市町村はあるのでしょうか。

富山 例えば、セレッソ大阪は子どものクラブを総合型として行っています。株式会社が子会社のような形で運営している。大阪エヴェッサもそうです。そういうプロチームが社会貢献部門を総合型として独立法人にして行っている事例があります。自治体では例えば琴平町のように、スポーツ施設を行政が作りそこを指定管理で委託に出して、その指定管理者が総合型ということで地域住民に事業を委託し

ている。そんな事例は、全国でもたくさんあります。

富田 活動するフィールド・場所は、市の体育館であったり、各小中学校であったり、市のプールであったり、そこで活動している方々たちが、いろいろなスポーツを指導・コーディネートできる方々が、日常的に活動しているのが理想だと思います。そういうものを、どうセッティングしていくのが大切です。例えば泉大津の子ども会では、男子はソフトボール、女子ならキックベースボールが盛んに行われており、保護者がボランティアで指導しています。各競技団体でもそのような例は多いのではないかと思います。保護者が引き継ぎながら、子どもたちを指導している。子どもがチームに入りたい家はお父さんも入って、途中でコーチになって指導している。そういう状況が少なからずあります。これらを一本化して総合型クラブにするのは、現実には難しいと思います。子どもたちが自然にスポーツに親しめる場所をきちんと提供する。そこで指導する方々は、サッカーさせたい人は、本当はサッカーだけをさせたいんです。しかし、サッカーしかできないスポーツクラブには、野球をさせたい子どもたちの保護者は、子どもをそこへは行かせませんよね。そうするとトータルで場所を提供することはできなくなってしまいます。どうしてもひとつのスポーツがそのまま総合型になってしまいがちではないのかと思います。本来は、ここに来ればいろんなスポーツに自由に親しめる、保護者以外のいろんな専門的な指導者から基礎トレーニングやけが対策など指導を受けられるというのが総合型の理想だと思います。しかし、現実にはそうはいかない。クラブハウスがあって、野球やサッカー、バスケットやなどいろんなスポーツを楽しめる総合型がというのは、理想ではありませんがやっぱり難しいと思います。

それなら、泉大津型の総合型地域スポーツクラブとは何なのか。富山先生やいろんな方々に協力いただいて模索・検討してもらっているところですが、他の市町村と違うのはどういうところでしょうか。

富山 かつては、保護者たちが、子ども会でソフトボールやキックベースボールを教え、子どもたちも楽しんできました。そこから時代が進んで環境が変わり、従来のやり方では不安定になってきました。つまり、これまでは保護者も苦労をいとわず子どもといっしょに通ってきたが、今ではクラブへ教えに行かない保護者も出てきました。それなら、教えに行かない保護者でも必ず参加させないといけないのかということが問題になって、参加している人とぎくしゃくしてきた。また、あまり知識のないまま子どもたちを指導するので、必ずしも子どもにとってプラスではない場合もありました。子どもをどう指導するのか、きちんと理解してもらいたいという考えも出てきた。保護者が子どもを教えるのはいいことなので残していけるならばそれはそれでいいと思いますが、子どもたちが地域でスポーツすることにどういう価値があるのか、ということの説明も必要になってきました。今は楽しいゲーム機があり、塾があり、キャンプもあり、レクリエーションにいろんな選択肢がある中で、子どもたちが今なぜここでスポーツすることが大事なのか、どのような価値があるのか、という説明が難しくなっています。この活動ではこんなことを狙いにしている、ここへ来ればどういう成果があって、価値があるということを示す必要がでてきたのです。成果が上がれば、多少のお金を払ってでも保護者は子どもを通わせる。自主性や自分たちでやってきた頃からすれば、いろんなものが商品として消費社会が成熟した現在では、様々なものごとにはこんな価値があると示されてきましたが、スポーツに限っていえば取り残されてきているんじゃないかと思います。だからプロフェッショナルな視点が必要なのです。

今、私の家に入る NPO のサッカー教室のチラシには、「子どもたちがここへ来たらこんなことができます」ということが、ちゃんと書いてあります。そういうことをきちんと示せさえすれば、お金を払って子どもを通わせる保護者は増えると思います。それ

が、少しプロフェッショナルリズムの入った総合型ということなのです。

泉大津市さんの準備委員会を進めてきた中でマイナスなこと、例えば体育館が古いとか、市の面積が狭いとか、直営でやっていることなどを聞かされました。そういうことの一つ一つは、実は見方によってはものすごくチャンスなのです。例えば体育館が指定管理ではなく泉大津市教育委員会の直営だということは、やり方を変える時に直接手を下せるということです。その仕組みを自分たちの内部で少し変えるだけでそこに総合型ができる。面積が狭いけれども、みんなが自転車で行き来できるエリアだからこそ、そこでクラブをひとつ作れば全市を網羅したクラブが作れる。体育館が古いのでちょうど改修するならばそれにあわせて市民が使いやすいもの、クラブの活動にあわせた施設に少しアレンジできるのではないのでしょうか。マイナスに感じているところを活かして、プラスに転じていければということで、今、検討委員会を進めているところです。それが、泉大津市型になればいいかなと思います。

富田 私はほとんど先生と同じ考えで、先生がおっしゃっていたような泉大津市の利点・チャンス・可能性は非常にあると思います。既存の様々な活動の中で今活躍してくださっている方が核になっていただけのような方法を模索していかなければと思います。そこへ給料を出すというのは少し難しいですが、今まで頑張ってきた皆さんが、うまく新しいものにスムーズにのっていける形を考えていくことが大事です。ハード面の整備は体育館を改修しようという今のタイミングで、可能性もあります。

問題はソフト面です。実は今年あたりから中学校の生徒数が減ってきています。他市ではこれまでもかなり減ってきていましたが、泉大津市ではこれまで増えていました。ところが、今はちょうど減りはじめていて、それに伴って先生が減少していきます。先生が減ると、つぶれるクラブが出てくる可能性が

あります。かつては保護者が盛んに「クラブの顧問の先生を何とかしてください」と要望する時期もありましたが、今は顧問の先生を用意して、とりあえず誰かがお世話をしても、専門的な指導はできないんです。そんな学校で指導を得られない子どもたちが、体育館に通って来ればそこに指導者がいるという事は素晴らしいことだと思います。

大塚 社会教育主事の研修で聞いたのですが、兵庫県は、総合型スポーツクラブを少なくとも市町村にひとつ以上置くことを決め、その時に「補助金を出すから、小学校区にひとつクラブをつくれ」という指示を出しました。兵庫県のとある小さな町では、11 小学校区に 11 クラブがあります。お金をもらえるならとりあえずクラブを建てましたが、そのほとんどが、運営実体がない状況になっています。また、和歌山県の上富田や熊野のクラブでは、会費をとらないとボランティアでは続かないので、経営意識が非常に大事だと話していました。いずれも、共通する課題は、運営にあたってはクラブの理念や方向性がなければならないということがいえます。富山先生がおっしゃるような、価値的な経営により資金を回転させるような運営、求心力のある人材の確保、クラブ運営理念の共有といったことを実現させるためには、泉大津市の市民性や現状を踏まえた上で、教育長のお考えはいかがでしょうか。

富田 部活動の話でいうと、部活動では毎月お金は取れない。本当は部活動している先生方は、自腹も切り時間も割きやっていますが、なかば好きでやっています。自分もやっていました。例えば、僕は女子ソフトボールだったので、市のグラウンドに女子ソフトボールをしたい子どもたちを集めて、クラブが成り立たない中学校も含めて、泉大津市の子どもたちを集めてソフトボールを指導する。月いくらですというのはちょっと感覚が違います。とにかくお金はいらぬから来て、集まれと、ただでいいよとのイメージになります、それではグラウンドの借り

る費用などが用意できない。難しいところです。

富山 総合型の草分け的なクラブに、成岩スポーツクラブがあります。ここでは学校のクラブを全てやめて、夕方は全て成岩クラブの活動として、先生もクラブの指導者として指導しています。かなり行政主導でスタートしましたが、体育館を新地域共同利用型に建て替えて成功した事例のひとつだと思います。どこかで思いきることが必要です。成岩クラブが使用する場合は、グラウンドの使用料を部活扱いで減免できます。

全て行政が補助金を出すのならともかく、お金を徴収するシステムだと、お金がない世帯の子は来れないじゃないかとなると反発もでてきます。それを、例えば学童保育を通じてクラブに行けば、そこでは無償でスポーツをさせてくれるといったふうに、重層・複層型にして、いろんなタイプの活動の中で「スポーツができる」というシステムを作る必要があるのではないかと考えています。例えば、ソフトボールをしようとしたらお金がかかるけれど、学童や部活動でやればお金がかからない、そんな自然な形をつくっていかればと思います。

富田 土・日にしている、子ども会のソフトボール・キックベースボールの活動については、いろいろな課題がありつつ、まだ泉大津ではそういう従来のやり方で活動している方々がおられます。その方々が立ち上がって、小学校の土・日の校庭開放なんかをしてくださっています。今後、理想の形へ踏み切る時に、なかなかこういうパターンはイメージされて



対談の様子



いません。泉大津市としてどういう形がいいのか、そこには迷いもあります。泉大津では、古くから部活動を盛んにしてきました。私が新任で赴任した時には、全員ができてできなくても体育部の顧問をしました。土・日も練習し、自分も勉強をしました。子ども会でもソフトボールの監督をしたこともあります。保護者であっても、地域でもすごい指導をされている方もおられます。そういうことをベースに考えると、なかなかひとつには集められません。サッカーをしたい子は、専門的な指導を受けサッカーをするイメージはできますが、お金がある子もない子もスポーツに親しむような環境とは、どのようなものがベストか、なかなかイメージが持てません。

本当にお金がある市は、学童保育そのものを民間業者に委託し、中に勉強の内容やスポーツのメニューなど特別なサービスとして盛り込んだところに委託しています。すると確かに、費用を払うことによって専門的な指導を受けられるんです。でも、お金のない子の場合はどうなのか。市が学童保育の委託を考えていないところは、効率的な方法を考えなければなりません。総合型が本当に理想なのか、総合型にもいろいろな形があって、かつてはクラブハウスが必要でしたが、今では形が変わってきています。

最初にお話した、生活の中にスポーツが根付いていて、文化として日常生活の中にあるというところうまくできないのか、そこが今僕自身の課題です。検討委員会で、どのようなお話が出ているのかあまり詳しくはわかりませんが、趣旨はできているが、実際に動き出してみるとついていけない部分や、とりこぼしがあるんじゃないか危惧します。この辺

をうまく支えていくものがないのかなと思います。全く違う形でもよいと思います。何かいいアイデアがないかと思っています。

富山 例えば来年度に総合型クラブを設立するとして、そこに全てが収斂されることにはならないと思います。ただ、明らかにいえることは今までのやり方をこの先10年20年続けるのはしんどい。実際に先細りになってきてますし、ソフトボールをすごく指導できる人もいるけれど、いつまでもやってただけのことはできない。それらを全て巻き込んで理想型でスタートすることはできないと思います。総合型クラブは、クラブを作ることより、仕組みの問題だと思っています。仕組み作りを考えていけば、今まで混沌としたものに方向性をつけて、そこに向けた組織を作りスタートする。その時に、検討委員会の場へソフトボールのお父さん方にも来てほしいと思います。そういう人たちに来ていただいて、総合型ができればどんなやり取りをしたいのか、どんな課題を解決したいのか聞きたいと思います。そして「相互協力の調整役ができたので、お手伝いしましょうか」という話し合いをします。

今まで聞いてきた課題でいえば、種目別団体で事務的な運営が非常に負担になっている、というものがあります。それについては事務局機能を総合型が担えるのではないかと、というようなことを提案するというようなことです。そうすることで、その人たちの負担を軽くし、もっとやりやすくなるのではないかと、という話を今しています。

いろんなスポーツに関わる人たちに委員会に入ってもらいたい。その問題を解決できる仕組みを作って、それを総合型と呼ぶということで、動きながら調整役をしながら、今の仕組みの中から漏れている子どもたちをこんな風に拾いましょうと、そんな検討の場というイメージです。それがないと今までと同じです。

富田 興味深いのは、いろいろな課題について話し合う場がない現状を、総合型スポーツクラブという

名の検討の場をつくって話し合いをする、という発想です。例えば、体育協会では加盟しているのは個別に活動している団体ですが、協会そのものは個々の団体が抱える問題を検討する場ではありません。また子ども会のソフトボールと学校などの部活動では、互いに話し合う場はありません。総合型を、課題を検討する場として捉えるのは非常におもしろいと思います。

大塚 例えば、兵庫県や運営自体の実体のない地域では、課題の検討が抜けていたという問題もありました。教育長がおっしゃった「迷いがあるということをもみんなで共有する」ためにはどういった形がいいのか、それぞれ違う総合型でいいのかといった点を、現在検討している段階です。迷いをみんなで少しずつ解消しているところです。富山先生がおっしゃった、全てを集約することは現実には難しいですが、泉大津市が柱とすべきところについては検討をしていくべきだと思います。

富田 課題意識がそれぞれ違うと思います。競技団体は事務が大変だと言っている、子ども会は存続自体が大変で、保護者が指導することも大変で、子ども会の指導者に市が校庭開放を任せている、それで本当に土・日に子どもたちの自由なスポーツの場の確保になっているのか。

そんな中で、例えば中学校の部活動も存続が大変で、部活動でどこかに行く時の安全の保障や、実はいろいろなスポーツをする環境に対する課題がある中で行われている。学校として部活動は課題ですから、地域の皆さんに協力をお願いするとすると、なぜ協力しなければならないのかと、疑問が当然わいてきます。「われわれ保護者は、子ども会の指導だけでも大変なのに、なぜ部活動の応援をしないといけないのか」となります。しかし、自分たちの課題も一緒に解決してくれる組織なら協力するし、担っていこう、続けていこうとする意識も出てきます。ところが、「市の課題がこうだから皆さん協力してください」ということだけなら、協力する意味が見い出



せない。「自分たちのスポーツを続けていきたい」「自分たちの競技団体の課題も、協力することである程度解決できるのではないかと、いろんな課題や問題意識をもっている人に入ってもらって。そして、そこでの課題を出してもらい、「それについてはこちらの競技団体が協力できる」といった直接の助け合いをお互いができる仕組みになれば、総合型をつくっても維持できると思います。

大塚 今の段階もそうですし、クラブができてからもそういう検討の場になったらいいですね。

富山 それを上からではなく、みんなフラットであることが必要です。「場所がないなら、私たちその日半分空いてるで」みたいな調整ができてくるような関係ができて、そこでの活動に総合型という網をかけることで、クラブができるのではなく仕組みができる、ということにつながると思います。

富田 今、学校のプールだけでなく市民プールをどうするのか、学校のグラウンド、体育館の市民への開放の形がこれでいいのかという検討を始めています。学校のグラウンドや体育館は既存の団体が、年間を通しておさえてしまっている。学校も今更断れず、認めてしまっているが、新たな団体が入れない。そもそも学校の体育館を、不公平な形で貸すのは具合が悪いのではないかと指摘もあります。市の総合体育館、学校の体育館、学校のプールなどを、もう少しきれいな形で市民に開放して、いろんな団体が平等に使える仕組みを考えています。このタイ

ミングで仕組みをつくるのはすごく可能性があると思います。仕組みだけでなくハードをさわるチャンスでもあります。新しい市民プールをつくる話がある一方で、学校が使用しているプールのいくつかを市民プールとして活用する。そのためにお金を投入して整備するほうが、安く上がる。新たに全天候型の市民プールを大きく作るのではなく、今ある既存のプールを整備したほうが安上りではないかとかいろんな意見が出ています。ハード面の整備と、小中学校の体育館や施設の貸し出しなどソフトの整備の両方ができないか、と思っています。

富山 先ほど言われたような、「これが課題だから協力しなさい」という、上からの言い方だと絶対反発がきます。でも、どこかで上から降ろさなくてはなりません。例えば、施設の利用において、今までの既存の体育館などを占有している団体があれば、「ダメだ」ということを上から言わなくては進まないんです。調整が無理な場面では、行政の突破力が必要だと思います。「それは協力しなさい」「これはダメ」と言わなくてはならないタイミングがあると思います。一時、悪者にならなくてはなりません。仕組みを変えるのにはそこが必要で、発動することがポイントだと思います。

4. 地域・大学連携の今後のあり方

大塚 今後を見据えた事業展開をしていく上で、個人的には行政職員個人が「自治体を経営する」という視点を持つべきだと思っています。そのためには行政だけの知識だけではなく、大学の知的研究資源や研究の場の活用などが、非常に重要になると思います。一方大学では、3年前の大学改革実行プランの中で「地域の核となる学校機能の強化をしていく」というプランが掲げられており、大学と行政の連携は重要性を増しています。大学の立場から富山先生が泉大津市に求めるものは何でしょうか。

富山 地域連携がわれわれにどんな見返りがあるのかということ、事例、データ、研究です。そして大学

で構想していることが実現する、ということです。

先ほど突破力ということを言いましたが、行政の仕組みを変えていこうとする時に、健康は保健福祉だとか、スポーツは教育委員会だとか、公園は建設だとか縦割り行政の壁があります。それは、本来私たちではどうすることもできません。しかし、連携事業を通じて、泉大津市の内部からそこを突破することができれば、健康づくりも、公園づくりも、教育やスポーツも同じ土俵の上で、それらの資金も集約しながら包括的な活動ができるかもしれないのです。

市の総合計画にも、市をあげての取組みとして行政の枠を越えた包括的な活動についても示されていますので、大学連携の中で内部の調整ができればと思っています。特に、健康分野との連携は、お互いの仕組みの中で困難な面もあるでしょうが、非常に期待しています。

大塚 まさに、社会教育主事の役割と同じですね。次に教育長から、市が大学に求めるものについてをおうかがいします。

富田 別のところでも話をしましたが、職員がすごく減っています。教育委員会事務局だけでも、正職員でいうと平成元年に135～136人いたのが、平成26年には50人くらいになりました。比較すると、25、26年で3分の1とは言わないまでも、4分の1以上正職員が減っています。すると一人一人の力がすごく重要になってきます。社会教育主事研修もそうですが、コーディネイトのスペシャリストにならないと、単純に事務的な仕事だけをやっている職員では対応できません。一人一人がスペシャリストというのは現実にはないので、大学の知見を借りることが必要になっています。

検討の場というのが総合型の足掛かりのひとつになるということなど、今日のお話を聞くまで私は全然思っていなかったし、何か形としての総合型クラブを考えてはいましたが、なかなかできないとも思っていました。ところが、まずは検討の場を設けてい

ろんな団体や市の持っている課題について、市も入って課題解決のために話し合っていくことが、総合型へと続く可能性があることを教えていただきました。この団体に担ってもらうための形をつくったり、必要なければやめる、このような判断は、大学の先生方の知見がないと、われわれだけではできません。行政が単独でいろんな情報を収集し、行政単独で推進するだけではダメな時代です。行政が気付かない、いろいろな専門的なことを教えてほしいのです。

先ほど市に求める部分でお話しいただきましたが、アイデアや情報があっても、それを地域や市が受け止められるのかは、とても大事です。市にあわないものは受け入れられないし、理想は良くても受け入れられない団体さんもいます。大学にはいろんな情報や方法を教えていただくことを期待しています。

大塚 現在の連携事業は3か年計画で行っていますが、当面めざすべきものは何かという点をお聞かせください。まずは教育長からお願いします。

富田 一定の実績を上げて継続しながら、発展的な内容に切り変えることが必要です。現在は様々な分野での連携を3大学で行っていますが、これからは、例えば1点に重点をしばってやっていく場合もあるかもしれません。うちの体力では、全部に力を入れてやっていくことはできません。3年間やってみて、その方向性でいけるのかどうか判断し、強弱をつけて進めていきたいと思っています。

富山 3年で何ができたのかは問われると思います。現実的な成果をきちんとあげていければと思います。総合型のイメージは、まず組織をつくり、次に組織を通じて地域と関わっていくことだと思っています。いろんな組織とかかわりながら、様々なことができていければと思います。地域の方たちの媒体としての総合型を作ってしまうと、それを通していろんなことがやりやすくなります。それが3年間の成果になると、私はイメージしています。

富田 媒体としてというのは、面白いと思います。地域の方は、言葉は悪いかもかもしれませんが、わりと目先のこととか、今の自分の課題とかをおっしゃられるので、やはりそれを無視して「こうですよ」だけではだめです。目先の課題を解決しながら、方向性を持っておく必要があります。自分たちの課題を、総合型を媒体に解決する。そこに入ってくるいろんな団体さんや組織の力を借りて、うちの課題も解決する。それぞれが解決できるという仕組みですね。

富山 自分も関わって作ったという意識が大事だと思います。市が勝手に作ったのではなく一人一人の意見を聞いて、「あの時のこう関わってできた」というほうが思い入れもあります。自分たちも大事にされているという意識もあります。それが大事です。これから設立に向けてどれだけの人を巻き込めるかが、その先の運営にかかっていると思います。

大塚 総合型クラブの設立が大きな目標という点で一定共有できたと思います。これを機により強力な連携を図っていきたいと思います。本日は、ありがとうございました。

(平成27年8月24日収録)



握手を交わす富山教授と富田教育長

泉大津市教育委員会・三大学連携推進協議会設置要綱

(設置目的)

第1条 この要綱は、地域コミュニティの再構築に係る大学連携事業に関する覚書第3条の規定に基づき、大阪体育大学、プール学院大学・プール学院大学短期大学部、桃山学院大学（以下「三大学」という。）及び泉大津市教育委員会（以下「教育委員会」という。）が連携して、地域課題を抽出し、課題解決に向けた取組みについての支援を行うことで、社会教育活動の活性化を契機として、地域の絆や地域コミュニティの再構築及び地域全体の活性化を図ることを目的として、泉大津市教育委員会・三大学連携推進協議会（以下「協議会」という。）を設置する。

(協議事項)

第2条 協議会は、前条に掲げる目的を達成するため、次に掲げる事項について協議する。

- 1 教育委員会と三大学が協力して行う地域発展の事業及び課題解決に向けた調査・研究に関すること。
- 2 教育委員会と三大学及び市民との相互の交流を推進する事業に関すること。
- 3 その他目的達成のために必要と認める事業に関すること。

(組織)

第3条 協議会委員は、大阪体育大学、プール学院大学・プール学院大学短期大学部、桃山学院大学及び教育委員会が指名するものをもって充てる。

(会長)

第4条 協議会に座長を置き、委員の互選により選任する。

- 2 座長は、会務を総理する。
- 3 座長に事故あるときは、あらかじめその指名する委員がその職務を代理する。

(会議)

第5条 協議会は、座長が招集する。

- 2 協議会においては、座長が議長を務める。
- 3 協議会は、必要があると認められるときは、委員以外の出席を求め、その意見を聴くことができる。
- 4 協議会は、座長（座長に事故あるときは、その職務を代理するもの）及び半数以上の委員の出席がなければ、会議を開くことができない。

(事務)

第6条 協議会に関する事務は、泉大津市教育委員会教育部生涯学習課において処理する。

(雑則)

第7条 この要綱に定めるもののほか、協議会の運営に関し必要な事項は、協議により定める。

附 則

この要綱は、平成26年8月25日から施行する。

地域と大学が――

歩む。

平成27年度
地域大学包括連携事業報告書

発行日 / 平成28年3月31日
執筆・編集 / 泉大津市教育委員会・三大学連携推進協議会
印刷 / 明新社
発行 / 泉大津市教育委員会・三大学連携推進協議会
〒595-8686
大阪府泉大津市東雲町9-12 泉大津市教育委員会生涯学習課内
TEL 0725-33-1131
FAX 0725-33-0670